

# Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa) の研究 —VP 3.7.81–86

小川 英世

## 0 問題の所在

バルトリハリは、Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」章 (Sādhanasamuddeśa) 第 70 詩節から第 79 詩節において、〈目的〉を二つ有する動詞語根 (dvikarmaka) が使用される文、いわゆる二重目的語構文 (double accusative construction) に関する、A 1.4.51 akathitaṃ ca 定式化の必要性をめぐるパーニニ文法家の議論を詳細に検討した<sup>1</sup>。次の文を見よ。

[1] *ajāṃ nayati grāmaṃ devadattaḥ*

(「デーヴァダッタは雌ヤギを村に連れて行く」 *ajām: ajā* 「雌ヤギ」 acc. sg. f.; *nayati: nī* 「連行する」 3rd sg. active present; *grāmam: grāma* 「村」 acc. sg. m.; *devadattaḥ: devadatta* nom. sg. m.)

[2] *ajā nīyate grāmaṃ devadattena*

(「デーヴァダッタによって雌ヤギが村に連れて行かれる」 *ajā* nom. sg. f.; *nīyate* 3rd. sg. passive present; *grāmam* acc. sg. m.; *devadattena* instr. sg. m.)

[3] *paktvaudano bhujyate devadattena = paktvā odanaḥ bhujyate devadattena*

(「デーヴァダッタによって米粥が煮られてから食べられる」 *paktvā: pac* 「料理する、煮る」 absolutive; *odanaḥ: odana* 「米粥」 nom. sg. m.; *bhujyate: bhuj* 「食べる、飲食する」 3rd sg. passive present; *devadattena* instr. sg. m.)

[1] と [2] において使用されている動詞語根 (dhātu) *nī* は、連行〈行為〉を意味する〈目的〉を二つ有する動詞語根である。[1] は能動文であり、名詞語基 (prātipadika) *ajā* と *grāma* の後には第二格接辞が導入されている。[2] は [1] と意味的に等価な受動文であり、*ajā* の後には第一格接辞が、*grāma* の後には第二格接辞が導入されている。パーニニ文法家は、[2] の構造を、一方の〈目的〉である村 (*grāma*) に比して主要なる〈目的〉である雌ヤギ (*ajā*) が、*bhujyate* の *l* 接辞 (*laṭ* → *-ta* → *-te*) によって〈目的〉として表示されている (abhihita) と説明する。[1] と [2] は、一つの動詞語根が表示する〈行為〉に対して二つの〈目的〉が関与する事態の表現である。これに対して、[3] は、同一の米粥が動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉と動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉という二つの〈行為〉に対して〈目的〉として機能する事態の表現である。さらに以下の文を見よ。

[4] *iṣyate grāmo gantum devadattena = iṣyate grāmaḥ gantum devadattena*

(「デーヴァダッタによって村が行こうと欲される」 *iṣyate: iṣ* 「欲求する」 3rd sg. passive present; *grāmaḥ: nom. sg. m.*; *gantum: gam* infinitive; *devadattena* instr. sg. m.)

[4] においては、村 (*grāma*) を〈目的〉とする動詞語根 *gam* が表示する進行〈行為〉が動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉に対して〈目的〉として機能する事態が表現されている。

ところで、[3] と [4] の能動文は以下のとおりである。

<sup>1</sup>小川 [2014; 2015] を見よ。

[5] *paktvaudanam̐ bhuñkte devadattaḥ = paktvā odanam̐ bhuñkte devadattaḥ*

（「デーヴァダッタは米粥を煮てから食べる」 *odanam̐*: acc. sg. m.; *bhuñkte* 3rd sg. active present)

[6] *icchati grāmam̐ gantum̐ devadattaḥ = icchati grāmam̐ gantum̐ devadattaḥ*

（「デーヴァダッタは村に行こうと欲する」 *grāmam̐* acc. sg. m.; *icchati* 3rd sg. active present)

[5] と [6] においては、〈目的〉である米粥と村を表示する *odana* と *grāma* の後に、[3] と [4] においては第一格接辞が生起しているのに対して、第二格接辞が生起している。

ここで問題が起こる。受動文 [3] と [4] においてなぜ *odana* と *grāma* の後に第二格接辞が生起して以下のような文が派生されないのかという問題である。

[7] \**paktvaudanam̐ bhujyate devadattena = paktvā odanam̐ bhujyate devadattena* (*odanam̐* acc. sg. m.)

[8] \**iṣyate grāmam̐ gantum̐ devadattena = iṣyate grāmam̐ gantum̐ devadattena* (*grāmam̐* acc. sg. m.)

カーティアーヤナとパタンジャリはこの問題の解決法をそれぞれ A 3.4.26 *svādumi ṇamul* に対する *Vārttika* と *Bhāṣya* において提案している。

*paktvā* は *kṛt* 接辞 *ktvā* で終わる項目（← *pac + ktvā*）であり、*gantum* は *kṛt* 接辞 *tumun* で終わる項目（← *gam + tumun*）である。これらの *kṛt* 接辞は、それで終わる項目が *avyaya*（「不変化詞」）と呼ばれるものであり、パーニニ文法家達が *avyayakṛt*（「不変化詞 *kṛt*」）と呼ぶものである<sup>2</sup>。カーティアーヤナは、文中で使用される不変化詞 *kṛt* は定動詞形の定動詞接辞と指示対象を同じくする (*samānādhikaraṇa*) という新規規定によって問題の解決を図り、これに対してパタンジャリは、不変化詞 *kṛt* は *kāraka* を表示せず、それが添加される動詞語根の意味としての *bhāva*（〈行為〉）を表示するとして、文意は定動詞形が表示する〈行為〉を核とするとする文意論の観点から解決を図る。バルトリハリが第 81 詩節から第 86 詩節において論ずる問題は、上記の不変化詞 *kṛt* で終わる項目が使用される文における〈目的〉表示のための名詞接辞導入の問題であり、そこに提示される解決法は、まさしくパタンジャリの見解の敷衍である。

VP 3.7.81–86 は以下のとおりである。

VP 3.7.81: *pradhānetarayor yatra dravyasya kriyayoḥ pṛthak / śaktir guṇāśrayā tatra pradhānam̐ anurudhyate //*

「[単一の] 〈実体〉に、主要なる (*pradhāna*) [〈行為〉] とそうでない 〈行為〉に対する異なる能力がある場合、従属要素 (*guṇa*) を拠り所とする能力は主要要素 (*pradhāna*) に従う」

VP 3.7.82: *pradhānaviṣayā śaktiḥ pratyayenābhidhīyate / yadā guṇe tadā tadvad̐ anuktāpi prakāśate //*

「主要 [〈行為〉] を対象とする能力が接辞によって表示されるとき、従属 [〈行為〉] に対する [能力] が、実際には表示されていないにもかかわらず、あたかもそれであるかのように [すなわち、表示されているかのように] 顕現する」

VP 3.7.83: *pacāv̐ anuktaṃ yat karma ktvānte bhāvābhidhāyini / bhujau śaktyantare 'py ukte tat taddharmaḥ prakāśate //*

「*bhāva*（〈行為〉）を表示する *ktvā* で終わる項目 [*paktvā*（「料理してから、煮てから」）] があるとき、料理 〈行為〉 (*paci*) に対する 〈目的〉は [接辞 *ktvā* によって] 表示されないから、そ

<sup>2</sup>本論 4 を見よ。

れゆえ、飲食〈行為〉(bhujī) に対する〔〈目的〉能力〕—たとえそれは料理〈行為〉に対する〈目的〉能力とは異なるとしても—が表示される時、その〔料理〈行為〉に対する〈目的〉能力の、〕〔飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力がもつすでに表示されているという属性に類似した〕属性が顕現する」

VP 3.7.84: iṣeś ca gamiṣaṃsparśād grāme yo lo vidhīyate /  
tatreṣṇaiva nirbhogaḥ kriyate gamikarmaṇaḥ //

「さらに、[iṣyate grāmo gantum (「村が行こうと欲される」) においては、] 欲求〈行為〉は、進行〈行為〉との関係を通じて村を対象とするから、[欲求〈行為〉を表示する動詞語根 iṣ の後に導入される] l 接辞 [で終わる項目] においては、同じ動詞語根 iṣ [が表示する欲求〈行為>] による進行〈行為〉の〈目的〉[である村] の享受(対象化)が実現される」

VP 3.7.85: paktvā bhujyata ity atra keṣāṃcin na vyapekṣate /  
odanaṃ pacatiḥ so 'sāv anumānāt pratīyate //

「ある者達の見解では、*paktvā* [odanaḥ] bhujyate (「[米粥が] 煮られてから食べられる」) というこの文においては、料理〈行為〉は米粥を期待しない。その〔飲食〈行為〉の〈目的〉である米粥] が推理からこれとして [すなわち、料理〈行為〉の〈目的〉として] 理解される」

VP 3.7.86: tathābhiniṣau karma yat tiṅante 'bhidhīyate /  
ktvānte 'dhikaraṇatve 'pi na tatrechhanti saptamīm //

「さらに、定動詞接辞で終わる項目において表示される、入る〈行為〉に対する〈目的〉に関しては、たとえそれは *ktvā* で終わる項目 [が表示する〈行為>] に対しては〈基体〉であるとしても、人々は第七格接辞 [の生起] を望まない」

## 1 anabhihite

パーニニは、A 2.3.2 karmaṇi dvitīyā から A 2.3.73 caturthī ca āśiṣi āyuṣyamadrabhadraśala-sukhārthahitaiḥ までの名詞接辞 (vibhakti) 導入規則の支配規則・章題規則として以下の規則を定式化している<sup>3</sup>。

A 2.3.1 anabhihite // (「x が他の項目によって表示されていないとき」)

x が指示するのは、A 2.3.2 等で言及される意味条件である *kāraka* である。そして A 2.3.1 においてパーニニが想定する他の項目とは、カーティアーヤナによれば、l 接辞の代置要素である定動詞接辞 (tiṅ)・kṛt 接辞・taddhita 接辞・複合語 (samāsa) である<sup>4</sup>。[3] と [4]、および関連する文において名詞語基である *odana*、*grāma*、*devadatta* の後に導入される名詞接辞は、*kāravibhakti* (「*kāraka* 表示名詞接辞」) と呼ばれる。*kāravibhakti* 導入規則はこの規則の支配下にある。

今、例として、デーヴァダッタが〈行為主体〉(karṭṛ) として単一の米粥を〈目的〉とする料理〈行為〉を遂行している事態を表現する文の派生を挙げよう。次の連鎖を見よ。

[9] *odana-sup pac-laṭ (laṭ → tiṅ) devadatta-sup*

*laṭ* の l 接辞は、以下の規則によって、他動詞 (*sakarmaka*) に後続する場合には〈行為主体〉と〈目的〉、自動詞 (*akarmaka*) に後続する場合には〈行為主体〉と *bhāva* (〈行為〉) を表示する。

<sup>3</sup>パーニニは、術語 *vibhakti* を、名詞接辞 (*sup*) あるいは定動詞接辞 (*tiṅ*) を指示する術語として (A 1.4.104 *vibhaktiś ca*)、さらに特定の *taddhita* 接辞を指示するものとして (A 5.3.1 *prāg diśo vibhaktiḥ*) 使用する。この文脈では、*vibhakti* は名詞接辞を指示する。

<sup>4</sup>Vt. 5 on A 2.3.1: *tiṅkṛttaddhitasamāsaḥ paraṃkhyānam* // (「『定動詞接辞・kṛt 接辞・taddhita 接辞・複合語 (samāsa) によって表示されていないとき』という完全枚挙がなされるべきである」)

A 3.4.69 *lah karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥ* // (「*l*音はそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根 (*sakarmaka*) の後では〈目的〉と〈行為主体〉を表示し、〈目的〉をもたない動詞語根 (*akarmaka*) の後では *bhāva* (〈行為〉) と〈行為主体〉を表示する」)

動詞語根 *pac* (「料理する、煮る」) は他動詞であり、それに後続する *l*接辞 (現在時制接辞 *laṭ*) が〈行為主体〉を表示する場合 (能動) と〈目的〉を表示する場合 (受動) の二つの文の派生が可能である。

[10] *odana-sup pac-tip* (→ *pac-śap-tip*) *devadatta-sup*

[11] *odana-sup pac-ta* (→ *pac-yak-te*) *devadatta-sup*<sup>5</sup>

[10] (能動) においては、*l*接辞 (現在時制接辞 *laṭ*) の代置要素である定動詞接辞 *tip* (3rd sg. present *parasmaipada*) は〈行為主体〉を表示し、[11] (受動) においては、同じく *l*接辞 (現在時制接辞 *laṭ*) の代置要素である定動詞接辞 *-te* (← *ta*,<sup>6</sup> 3rd sg. present *ātmanepada*) は〈目的〉を表示する<sup>7</sup>。

さてここで考慮されるべき名詞接辞選択規則は以下のものである。

A 2.3.2 *karmaṇi dvitīyā* // (「〈目的〉が表示されるべきとき、もしその〈目的〉が他の項目によって表示されていないならば、第二格接辞が起こる」)

A 2.3.18 *karṭṛkaraṇayos tṛtīyā* // (「〈行為主体〉・〈手段〉が表示されるべきとき、もしそれらが他の項目によって表示されていないならば、第三格接辞が起こる」)

A 2.3.46 *prātipadikārthalingaparimāṇavacanamātre prathamā* // (「名詞語基の意味 (*prātipadikārtha*) だけ (*mātra*)、性 (*liṅga*) だけ、量 (*parimāṇa*) だけ、数 (*vacana*) だけが表示されるべきとき、第一格接辞が起こる」)

[10] においては、定動詞接辞 *tip* は〈行為主体〉を表示する。〈行為主体〉であるデーヴァダッタを表示する名詞語基 *devadatta* の後には、A 2.3.18 の適用による第三格接辞は起こらない。よって、*devadatta* の後には A 2.3.46 の適用により、名詞語基の意味だけの表示のために第一格接辞 *su* が起こる。一方、定動詞接辞 *tip* は〈目的〉を表示しない。よって〈目的〉である米粥を表示する名詞語基 *odana* の後には、A 2.3.2 の適用により第二格接辞 *am* が起こる。こうして以下の文が派生される。

[12] *odana-am pac-a-ti devadatta-su* → *odanam pacati devadattaḥ*

(「デーヴァダッタは米粥を煮ている」 *odanam*: acc. sg. m.; *pacati*: 3rd sg. active present; *devadattaḥ*: nom. sg. m.)

[11] においては、定動詞接辞 *-te* (→ *-ta*) は〈目的〉を表示する。〈目的〉である米粥を表示する名詞語基 *odana* の後には、A 2.3.2 の適用により第二格接辞が起こることはない。よって、名詞語基 *odana* の後には、名詞語基の意味だけの表示のために第一格接辞 *su* が起こる。一方、〈行為

<sup>5</sup>名詞接辞に関する導入一般規則 (A 4.1.2)、数系列選択規則 (A 1.4.21–22)、*l*接辞に関する導入規則 (現在接辞 *laṭ* A 3.2.123)、定動詞接辞代置規則 (A 3.4.78)、*parasmaipada* 群・*ātmanepada* 群選択規則 (A 1.4.99–100)、人称系列選択規則 (A 1.4.108)、数系列選択規則 (A 1.4.21–22)、*vikaraṇa* 導入規則 (*śap* A 3.1.68; *yak* A 3.1.67) についての詳細は、これまで度々言及したのでここでは省略する。

<sup>6</sup>A 3.4.79: *ta* → *te*.

<sup>7</sup>代置要素 (*ādeśa*) が原要素 (*sthanin*) に準ずる原則 (*sthānivadbhāva* [A 1.2.56]) についてはここでは触れない。

主体〉であるデーヴァダッタを表示する名詞語基 *devadatta* の後には、A 2.3.18 の適用により第三格接辞 *tā* が起こる<sup>8</sup>。こうして以下の文が派生される。

[13] *odana-su pac-ya-te devadatta-tā* → *odanaḥ pacyate devadattena*

(「米粥がデーヴァダッタによって煮られている」*odanaḥ*: nom. sg. m.; *pacyate*: 3rd sg. passive present; *devadattena*: instr. sg. m.)

このように、[3] においては定動詞形 *bhujyate* の定動詞接辞 *-te* によって動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に参与する〈目的〉である米粥が〈目的〉として表示されており (abhihita)、[4] においては、定動詞形 *iṣyate* の *-te* によって、動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉に参与する〈目的〉である村が〈目的〉として表示されている。

## 2 不変化詞 *kṛt* 導入規則

バルトリハリの当該議論に直接関係する不変化詞 *kṛt* は *ktvā*、*tumun*、*ṇamul* であり、それらの導入規則を *Kāśikāvṛtti* に基づいて概観しておこう。

これらの *kṛt* 接辞は、動詞語根 V1 と追使用項目 (anuprayoga) V2 が共起し、V1 と V2 が表示する〈行為〉の〈行為主体〉が同一 (samānakartṛka) であるときに、V1 の後に導入される。[3] においては *pac* が表示する料理〈行為〉と *bhuj* が表示する飲食〈行為〉の〈行為主体〉は同じデーヴァダッタである。一方、[4] においては *iṣ* が表示する欲求〈行為〉と *gam* が表示する進行〈行為〉の〈行為主体〉は同じデーヴァダッタである。

### 2.1 *ktvā*

*kṛt* 接辞 *ktvā* の導入規則は A 3.4.21 *samānakartṛkayoḥ pūrvakāle* である。*Kāśikāvṛtti* の説明は以下のとおりである。

KV on A 3.4.21: *samānaḥ kartā yayor dhātvarthayos tatra pūrvakāle dhātvarthe vartamānād dhātoḥ ktvā pratyayo bhavati / śaktiśaktimātor bhedasyāvivaṣṭatvāt samānakartṛkatā / bhuktvā vrajati / pītvā vrajati / dvivacanam atantram / snātvā pītvā bhuktvā dattvā vrajati / samānakartṛkayor iti kim / bhuktavati brāhmaṇe gacchati devadattaḥ / pūrvakāle iti kim / vrajati ca jalpati ca // āsyam vyādāya svapiti cakṣuḥ saṃmīlya hasatīty upasaṃkhyānam apūrvakālatvāt //*

「[解釈] 二つの動詞語根 (V1、V2) の意味である [〈行為〉] が同一の〈行為主体〉を有するとき、それらのうち、先行時にある動詞語根の意味である [〈行為〉] を表示する動詞語根 (V1) の後に、接辞 *ktvā* が起こる。

[特定の〈行為〉に相関した〈行為主体〉] 能力 (śakti) とその能力の保持者 (śaktimat) の差異は意図されないから、[能力保持者の同一性に基づいて、前後の〈行為〉が] 〈行為主体〉を同じくすることが成立する<sup>9</sup>。

[例]

*bhuktvā vrajati* (「彼は食べてから行く」)

<sup>8</sup>A 7.1.12: *tā* → *ina*.

<sup>9</sup>*kāraka* (〈能成者〉) を〈行為〉を実現する能力 (śakti) とその能力の保持者である実体 (dravya) の枠組みで説明する *kāraka* 理論は、パタンジャリによって用意され、バルトリハリによって体系化される。バルトリハリが [3] 等の文派生を説明する際にこの *kāraka* 理論に依拠することは後ほど明らかになるであろう。なおパーニニ文法学派のこのような *kāraka* 理論については小川 [2000] に詳論されている。

*pītvā vrajati*（「彼は飲んでから行く」）

*samānakartṛkayoḥ*（「〈行為主体〉を同じくする二つの〈行為〉のうち」）における双数接辞 (-os) によって [〈行為〉の] 双数性は意図されていない。[よって、以下の文が成立する。]

[例]

*snātvā pītvā bhuktvā dattvā vrajati*（「彼は、沐浴して、飲んで、食べて、布施してから行く」）

*samānakartṛkayoḥ*（「〈行為主体〉を同じくする二つの〈行為〉のうち」）言及の目的

[反例]

*bhuktavati brāhmaṇe gacchati devadattaḥ*（「バラモンが食べてからデーヴァダッタは行く」）<sup>10</sup>

*pūrvakāle*（「先行時にある〈行為〉を表示する」）言及の目的

[反例]

*vrajati ca jalpati ca*（「彼は行きそして同時につぶやく」）

*āsyam vyādāya svapiti*（「彼は口を開けて眠る」）

*cakṣuḥ saṃmīlya hasati*（「彼は目を閉じて笑う」）<sup>11</sup>

を説明するために、追加規定が設定されるべきである。[これら二事例において、*ktivā* 接辞が導入される動詞語根が表示する〈行為は〉先行時にあるものではないから<sup>12</sup>]

## 2.2 *tumun*

[4]に関する *kṛt* 接辞 *tumun* 導入規則は、A 3.3.158 *samānakartṛkeṣu tumun* である。Kāśikāvṛtti は次のように説明する。

KV on A 3.3.158: *icchārtheṣu dhātuṣu samānakartṛkeṣūpapadeṣu dhātos tumun pratyayo bhavati / tumunprakṛtyapekṣam eva samānakartṛkatvam / icchati bhoktum / kāmayate bhoktum / vaṣṭi bhoktum / vāñchati bhoktum / samānakartṛkeṣv iti kim / devadattaṃ bhuñjānam icchati yajñadattaḥ / iha kasmān na bhavati icchan karotīti / anabhidhānāt //*

「[解釈] 〈行為主体〉を同じくする欲求を意味する動詞語根 (V1) が共起項目であるとき、動詞語根 (V2) の後に接辞 *tumun* が起こる。

まさに接辞 *tumun* がその後に起こる基体 (*prakṛti*) [である動詞語根が表示する〈行為〉] に相関して、〈行為主体の同一性〉がある。

[例]

*icchati bhoktum*（「彼は食べようと欲する」 *iṣ*）

<sup>10</sup>A 2.3.37 *yasya ca bhāvena bhāvalakṣaṇam* が念頭にある。この規則は、〈行為主体〉xの〈行為〉が〈行為主体〉yの〈行為〉を特徴付けるとき、〈行為主体〉xを表示する項目の後に第七格接辞が起こることを規定し、〈行為主体〉間の差異が適用の条件である。

<sup>11</sup>*vi-ā-dā-ya; sam-mīl-ya: ktvā → lyap: A 7.1.37 samāse 'nañpūrve ktvo lyap // sam-mīlya* は *gati* と呼ばれる *sam* と *mīl-tvā* の *tatpuruṣa* 複合語の一種 *gatisamāsa* である。 *gatisamāsa* においては *ktivā* は *lyap* によって代替される。

<sup>12</sup>以下の *vārttika* に言及している。 Vt. 5 on A 3.4.21: *vyādāya svapitīty upasañkhyānam apūrvakālatvāt //*

*kāmayate bhoktum* (「彼は食べようと欲する」 *kam*)

*vaṣṭi bhoktum* (「彼は食べようと欲する」 *vaṣ*)

*vāñchati bhoktum* (「彼は食べようと欲する」 *vāñch*)

*samānakartṛkeṣu* (「〈行為主体〉を同じくする欲求を意味する動詞語根 (V1) が共起項目であるとき」) 言及の目的

[反例]

*devadattaṃ bhuñjānam icchati yajñadattaḥ* (「ヤジュニヤダッタはデーヴァダッタが食べるのを欲する」)<sup>13</sup>

なぜ以下の事例において [接辞 *tumun* は] 起こらないのか。

[反例]

*icchān karoti* (「彼は欲しているのでなす」)

[世間において、上記の意味での \**icchān kartum* の] 使用はないからである ( *anabhidhāna* )<sup>14</sup>

### 2.3 *ṇamul*

*kr̥t* 接辞 *ṇamul* の導入を規定する規則は A 3.4.26 *svādumi ṇamul* である。なお、パタンジャリが挙げる例文は以下の文である。

[14] *svāduṅkāraṃ yavāgūr bhujyate devadattena = svādum-kr̥-ṇamul yavāgūḥ bhujyate devadattena* (「粥 (*yavāgū*) がデーヴァダッタによって甘くされて食べられる」 *yavāgūḥ*: nom. sg. f.)

*Kāśikāvṛtti* は本規則を以下のように注釈している。

KV on A 3.4.26: (A) *samānakartṛkayoḥ pūrvakāle, kṛñāñ iti cānuvartate / svādumi ity arthagrahaṇam / svādvartheṣūpapadeṣu kṛñō ṇamul pratyayo bhavati / svāduṅkāraṃ bhuṅkte / saṃpannāṅkāraṃ bhuṅkte / lavaṇāṅkāraṃ / svādumīti makārāntanipātanam ikārābhāvārtham, cvyantasyāpi makārārtham dīrghābhāvārtham ca / asvādvīm svādvīm kṛtvā bhuṅkte svāduṅkāraṃ bhuṅkte / vāsarūpeṇa ktvāpi bhavati, svādum kṛtvā bhuṅkte /*

(B) *tumarthādhikārāc ca sarva ete bhāve pratyayāḥ / yady evam svāduṅkāraṃ bhuṅkte devadatta iti ṇamulā kartur anabhihitatvāt kartari kasmāt tr̥tīyā na bhavati / bhujipratyayenābhihitaḥ kartā, na cāsmiṇ prakaraṇe śaktiśaktimātor bhedo vivakṣyate, samānakartṛkatvaṃ hi virudhyate / pradhānaśaktyabhidhāne vā guṇaśaktir abhihitavat prakāśate //*

「(A) [本規則に A 3.4.21 *samānakartṛkayoḥ pūrvakāle* から] *samānakartṛkayoḥ pūrvakāle* が継起し、さらに [A 3.4.25 *karmaṇy ākroṣe kṛñāḥ khamuñ* から] *kṛñāḥ* が継起する。

<sup>13</sup>*bhuñjāna* (← *bhu-śnam-j-sānac*) の現在分詞 *ātmanepada* 接辞 *sānac* は、第一格接辞以外の名詞接辞で終わる項目—当該事例では第二格接辞で終わる項目である *devadattam*—と現在接辞 *laṭ* が同一対象指示の関係にあるとき、現在接辞 *laṭ* に代置される (A 3.2.124 *laṭaḥ śatṛśānacāv aprathamāsamānādhikarane*)。当該事例では *laṭ* は〈行為主体〉を表示する。欲求〈行為〉の〈行為主体〉はヤジュニヤダッタ、飲食〈行為〉の〈行為主体〉はデーヴァダッタである。

<sup>14</sup>*icchān* (「欲しているので」) は動詞語根 *iṣ* の後に導入された現在接辞 *laṭ* に現在分詞 *parasmaipada* 接辞 *śatṛ* が代置された項目である (A 3.2.126 *lakṣaṇahetvoḥ kriyāyāḥ*)。 *karoti* の動詞語根 *kr̥* にとって動詞語根 *iṣ* が共起項目であり、*kr̥* の後に接辞 *tumun* を導入する A 3.3.158 の適用条件は満たされている。

*svādumi* [の *svādu* (「甘い」) によって語形ではなく] 意味に言及している。

[解釈] 甘いという意味を有する項目 [とその同義語] が共起項目であるとき、動詞語根 *krñ* (「実現する」) の後に接辞 *ṇamul* が起こる<sup>15</sup>。

[例]

*svāduṅkāraṃ bhuṅkte* (「彼は甘くして食べる」)

*sampannaṅkāraṃ bhuṅkte* (「彼はおいしくして食べる」)

*lavaṅkāraṃ [bhuṅkte]* (「彼は塩辛くして [食べる]」)

*svādumi* という *m* 音で終わる [*svādu-m* という語形] の既成形提示 (*nipātana*) は、[A 4.1.44 *votogūṇavacanāt* による] 女性接辞 *ñiṣ* が起こらないようにするためであり<sup>16</sup>、[A 5.4.50 *krbhvastiyoge sampadyakartari cviḥ* により *svādu* が] 接辞 *cvi* で終わる場合も、それが *m* 音を取ることができるようになるためであり、[A 7.4.26 *cvau ca* による *svādu* の *u* 音に対する] 長音代置が起こらないようにするためである<sup>17</sup>。

[*ṇamul* が導入されない場合]

*asvādvīm svādvīm kṛtvā bhuṅkte* (「彼は甘くないもの (*asvādvī*) を甘いものにして (*svādvī*) 食べる」 (*a*-)*svādvī* ← (*a*-)*svādu-ñiṣ*)

[*ṇamul* が導入された場合]

*svāduṅkāraṃ bhuṅkte* (「彼は甘くして食べる」)

A 3.1.94 *vāsārūpo 'striyām* により、同形でない接辞 *ktvā* も [任意に] 起こる<sup>18</sup>。

[例]

*svādum kṛtvā bhuṅkte* (「彼は甘くして食べる」 *svādum* ← *svādu-cvi-m*)<sup>19</sup>

(B) [A 3.4.9 *tumarthe sesenase'asenksesanadhyaiadhyainkadhyaiśadhyaiśadhyaintavai-taveṅtavenaḥ* の] *tumarthe* (「*tumun* 接辞の意味で」) が [A 3.4.65 *śakadhṛṣajñāglāghaṭarabhalabhakramasahārḥāstyarthēṣu tumun* までの規則を] 支配するから、この [支配下] にある規則によって導入されるすべての接辞は、*bhāva* (〈行為〉) を表示する。[よって本規則が導入を規定する *ṇamul* も *bhāva* (〈行為〉) を表示する。]<sup>20</sup>

[反論] もしそうなら、*svāduṅkāraṃ bhuṅkte devadattaḥ* (「デーヴァダッタは甘くして食べる」) において、*ṇamul* によって 〈行為主体〉 は表示されていない (*anabhihita*) から、〈行為主体〉 を表示するためにどうして [*devadatta* の後に] 第三格接辞が起こらないことがあろう。

[答論] 動詞語根 *bhuj* (「飲食する」) に後続する接辞によって 〈行為主体〉 はすでに表示されている。そして、(1) この [〈行為主体〉 を同じくする 〈行為〉 を表示する二つの動詞語根の

<sup>15</sup>A 2.2.19 *upapadam atīn* による *upapada* 複合語を形成する。

<sup>16</sup>A 4.1.44 は、属性保持者表示項目 (*guṇavacana*) である、*u* 音で終わる名詞語基の後に、女性形で女性接辞 *ñiṣ* が任意に起こることを規定する。例えば *paṭvilpaṭuḥ* (「鋭敏な女」) である。

<sup>17</sup>Vts. 1–2 on A 3.4.26.

<sup>18</sup>A 3.1.94 は、A 3.3.94 *striyām ktin* で始まる女性形を派生する *kṛt* 接辞導入規則が規定する接辞以外の、例外規則が導入を規定する接辞は、同形でないならば、その一般規則が導入を規定する接辞の阻止が任意であることを規定する。A 3.4.26 は A 3.4.21 に対して例外規則であり、*ṇamul* による同形でない *ktvā* の阻止は任意である。よって、*ktvā* も起こる。

<sup>19</sup>*taddhita* 接辞 *cvi* で終わる項目は、A 1.1.38 *taddhitaś cāsarvavibhaktiḥ* により *avyaya* と呼ばれる。

<sup>20</sup>この言明は、A 3.4.9 に対する *Bhāṣya* に基づいている。本論 4 を見よ。



うち」の] 主題下では、能力と能力保持者の差異は意図されない。なぜなら、〈行為主体〉の同一性が矛盾をきたすからである。(2) あるいは、[能力と能力保持者の差異を前提とするなら] [主要〈行為〉を対象とするという意味で] 主要な能力が表示される時、[従属〈行為〉を対象とするという意味で] 従属的な能力は、すでに表示されているかのように (abhihitavat) 顕現する」

Kāśikāvṛtti (B) は、*svādunkāram bhunkte devadattaḥ* に関して、*ṇamul* 接辞による〈行為主体〉の非表示を前提とした *devadatta* の後への第三格接辞導入の可能性を議論している。この議論は、A 3.4.26 に対する Bhāṣya の議論を踏まえたものである。〈行為主体〉である実体 (dravya) としてのデーヴァダッタには *ṇamul* が導入される動詞語根 *kṛ* が表示する実現〈行為〉に相関して〈行為主体〉として機能する能力と動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に相関して〈行為主体〉として機能する能力がある。第一解釈は、能力と能力保持者の同一性を前提として、二つの能力の保持者である同一のデーヴァダッタが *bhunkte* の *-te* によって〈行為主体〉として表示されるという考えを提示している。この解釈では、〈行為主体〉の一方の項目一定動詞接辞 *-te* による表示と他方の項目 *ṇamul* による非表示は成立しない<sup>21</sup>。第二解釈はバルトリハリの見解を提示したものである。

### 3 MBh on A 3.4.26

カーティアヤナは、A 3.4.26 に対して以下の *vārttika* を述べている。

Vt. 3 on A 3.4.26: *ā ca tumunaḥ samānādhikaraṇe //*

「さらに、[A 3.4.65 までの規則が導入を規定する接辞は、[追使用項目と] 指示対象を同じくする場合に起こる、という新規規定が定式化されるべきである」

この *vārttika* に対する Bhāṣya を検討される文例に応じて分節して提示しよう。

#### 3.1 MBh on A 3.4.26 (1)

パタンジャリは先ずもって A 3.4.26 が導入を規定する *ṇamul* で終わる項目が使用される [14] を取り上げる。

(1) MBh on vt. 3 to A 3.4.26 (II.174.10–15): [A] *ā ca tumunaḥ pratyaḥ samānādhikaraṇe vaktavyāḥ / kena / anuprayoga / kim prayojanam / svādunkāram yavāgūr bhujyate devadatteneti devadatte ṛtīyā yathā syāt / kim ca kāraṇam na syāt / ṇamulābhihitaḥ karteti /*

[B] *nanu ca bhujipratyayenābhihitaḥ karteti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati ṛtīyā /*

[C] *yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayaḥ vidhiḥ bhaviṣyati ṛtīyā yavāgvām dvitīyā prāpnoti / kim kāraṇam / ṇamulānabhihitam karma iti /*

「[A] さらに、A 3.4.65 までの規則が導入を規定する接辞は、[追使用項目と] 指示対象を同じくする場合に起こる、という新規規定が定式化されるべきである。

[問] 何と [指示対象を同じくする場合] か。

[答] 追使用項目 (anuprayoga) とである。

[問] 何のために [定式化されなければならないの] か。

<sup>21</sup>kāraka の項目 x による表示と項目 y による非表示の論理については、MBh on A 3.4.26 (1) [C] (本論 3.1) を見よ。

[答] *svādūṅkāram yavāgūr bhujyate devadattena*（「粥がデーヴァダッタによって甘くされて食べられる」）において、*devadatta* に関して第三格接辞が起こるようである。

[問] どうして起こらないことがあるう。

[答] [A 3.4.67 *kartari kṛt* によって *kṛt* 接辞は〈行為主体〉を表示するから、*kṛt* 接辞 *ṇamul* によって〈行為主体〉はすでに表示されている (*abhihita*)<sup>22</sup>。

[B] [反論] 動詞語根 *bhuj* に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考えて、A 2.3.1 *anabhihite*（「表示されていない」）に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるであろう<sup>23</sup>。

[C] [答論] もし、[〈行為主体〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈行為主体〉の] 非表示があると考えて、A 2.3.1 *anabhihite*（「表示されていない」）に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるとするならば、*yavāgū*（「粥」）に関して第二格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *ṇamul* によっては〈目的〉は表示されていない (*anabhihita*)」

議論[A]によれば、[14]においては、A 3.4.67 *kartari kṛt* によって *svādūṅkāram* の *kṛt* 接辞 *ṇamul* は〈行為主体〉を表示する。*bhujyate* の *-te* は動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に対する〈目的〉を表示するから、飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉は、この *-te* によっては未表示 (*anabhidhāna*) である。一方、動詞語根 *kṛ* が表示する実現〈行為〉に対する〈行為主体〉は、*ṇamul* によって既表示 (*abhidhāna*) である。この *ṇamul* に依拠した場合、〈行為主体〉であるデーヴァダッタを表示する *devadatta* の後に A 2.3.18 の適用によって第三格接辞を導入することはできない。しかし、新規規定によれば、*ṇamul* は *bhujyate* の *-te* の指示対象である〈目的〉としての粥を指示することになる。結果 *ṇamul* に依拠しても実現〈行為〉に対する〈行為主体〉は未表示となり、この〈行為主体〉の未表示に依拠して *devadatta* の後への第三格接辞導入は正当化される。

議論[B]は、新規規定に依らずとも [14]における *devadattena* という第三格接辞で終わる項目が正当化できるとする。*bhujyate* の *-te* は飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉について未表示である。*ṇamul* によって実現〈行為〉に対する〈行為主体〉は既表示であるとしても、この *bhujyate* の *-te* による飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉の未表示に依拠して、〈行為主体〉であるデーヴァダッタを表示する *devadatta* の後に A 2.3.18 の適用によって第三格接辞を導入することができる。

議論[C]は、この理屈では [14]において *yavāgū* の後に第二格接辞が結果することを指摘する。飲食〈行為〉に対する〈目的〉は *bhujyate* の *-te* によっては既表示であり、実現〈行為〉に対する〈目的〉は *ṇamul* によっては未表示である。この *ṇamul* による実現〈行為〉に対する〈目的〉の未表示に依拠すれば、〈目的〉である粥を表示する *yavāgū* の後に第二格接辞が結果し、以下のような文が派生される。

<sup>22</sup>A 3.4.67 は、*kṛt* 接辞が〈行為主体〉を表示するために起こることを一般的に規定する。

<sup>23</sup>A 2.3.1 *anabhihite* の *an-abhihita* における否定辞 (*an-* ← *nañ*: A 6.3.73, 6.3.74) は、*prasajyapraṭiṣedha* (想定否定) と *pariyudāsa* (排除) の二様に解釈可能である。カーティアヤーナは、*prasajyapraṭiṣedha* 解釈に立つて以下の *vārttika* を述べている。Vt. 7 on A 2.3.1: *dvayoḥ kriyayoḥ kārake 'nyatāreṇābhihite vibhakti-abhāvaprasaṅgaḥ* //（「二つの〈行為〉に対するひとつの *kāra* が二項目のうちのいずれかの項目によって表示されているとき、名詞接辞 (*vibhakti*) は生起しないということが帰謬する」）一方、彼は *pariyudāsa* 解釈に依拠して以下の *vārttika* を述べている。Vt. 8 on A 2.3.1: *na vānyatāreṇābhidhānāt* //（「否、むしろこのような誤謬は起こらない。なぜなら、二項目のうちのいずれかによっては表示されないから」）ここでは、この *pariyudāsa* 解釈に基づいて議論が展開されている。ある *kāra* の項目 *x* による表示と項目 *y* による非表示があるとき、*pariyudāsa* 解釈では、項目 *x* による表示が排除されて、項目 *y* による非表示が定立される。したがって、A 2.3.1 は「項目 *x* によって表示されていても項目 *y* によって表示されていないとき」という意味となる。

[15] \*svāduṅkāraṃ yavāgūṃ bhujyate devadattena

よって、新規規定は定式化される必要がある。新規規定によれば、*ṇamul* と *bhujyate* の *-te* は二つの〈行為〉に〈目的〉として参与する同一の粥 (yavāgū) を指示する。粥は *bhujyate* の *-te* によって既表示である<sup>24</sup>。

### 3.2 MBh on A 3.4.26 (2)

パタンジャリは、[15] は *ṇamul* を〈行為主体〉ではなく〈目的〉を表示すると解することによって回避されるとする見解を提示する。議論の対象文は、[14] と意味的に等価なその能動文である。

[16] svāduṅkāraṃ yavāgūṃ bhunkte devadattaḥ = svādum-kṛ-ṇamul yavāgū-am bhu-śnam-j-te devadatta-su

(「デーヴァダッタは粥を甘くして食べる」 yavāgūṃ: acc. sg. f.)

(2) MBh on A 3.4.26 (II.174.15–20): [A] yadi punar ayaṃ karmaṇi vijñāyeta / naivaṃ śakyam / iha hi svāduṅkāraṃ yavāgūṃ bhunkte devadatta iti yavāgvāṃ dvitīyā na syāt / kiṃ kāraṇaṃ na syāt / ṇamulābhihitam karmeti /

[B] nanu ca bhujipratyayenānabhihitam karmeti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dvitīyā /

[C] yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dvitīyā devadatte tṛtīyā prāpnoti / kiṃ kāraṇaṃ / ṇamulānabhihitam karteti /

「[A] [反論] しかし、もしこの [*ṇamul* 接辞] は、〈目的〉を表示すると理解できるとすれば [第二格接辞の生起が結果しない]。

[答論] このように理解することはできない。実に以下の事例、すなわち *svāduṅkāraṃ yavāgūṃ bhunkte devadattaḥ* (デーヴァダッタは粥を甘くして食べる) においては、*yavāgū* に関して第二格接辞は起こらないことになろう。

[問] どうして起こらないことがあるう。

[答] 接辞 *ṇamul* によって〈目的〉はすでに表示されている。

[B] [反論] 動詞語根 *bhuj* に後続する接辞によって〈目的〉はいまだ表示されていないと考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起こるのであろう。

[C] [答論] もし、[〈目的〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈目的〉の] 非表示があると考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起こるとするならば、*devadatta* に関して第三格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *ṇamul* によつては〈行為主体〉は表示されていない

議論の論理展開は (1) と全く同じである。*ṇamul* が〈目的〉を表示するという条件下では、飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉は *bhunkte* の *-te* によって既表示であるとしても、実現〈行為〉に対する〈行為主体〉は *ṇamul* によつては未表示である。よつて以下のように *devadatta* の後に第三格接辞の生起が結果する。

<sup>24</sup>カーティアヤーナの新規提案は、A 2.3.1 *anabhihite* の *prasajyapratishedha* 解釈に立脚していることが示唆される。

[17] \*svāduṅkāraṃ yavāgūm bhūṅkte devadattena

しかしこの場合も、新規規定により *ṇamul* は *bhūṅkte* の *-te* が指示する〈行為主体〉であるデーヴァダッタを指示するとすれば、この誤謬は回避される。*bhūṅkte* の *-te* によってデーヴァダッタは既表示である。

### 3.3 MBh on A 3.4.26 (3)

次にパタンジャリはバルトリハリが検討する [3] を取り上げ、*ktivā* 接辞で終わる項目が使用される文に関する新規規定の有用性を主張する。

(3) MBh on A 3.4.26 (II.174.21–25): (A) athānena ktvāyām arthaḥ / paktvaudano bhujyate devadatteneti / bāḍham arthaḥ / devadatte ṛtīyā yathā syāt / kiṃ ca kāraṇaṃ na syāt / ktvāyābhihitaḥ karteti / (B) nanu ca bhujipratyayenānabhihitaḥ karteti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati ṛtīyā / (C) yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati ṛtīyau dane dvitīyā prāpnoti / kiṃ kāraṇaṃ / ktvāyānabhihitam karmeti /

「(A) [反論] この [カーティアーヤナが提案する新規規定] は、*paktvaudano bhujyate devadattena* (「デーヴァダッタによって米粥が煮られてから食べられる」) という *ktivā* で終わる項目の領域で有用だろうか。

[答論] 確かに有用である。*devadatta* に関して第三格接辞が起こるために。

[問] しかしどうして起こらないことがある。

[答] *ktivā* によって〈行為主体〉はすでに表示されている。

(B) [反論] 動詞語根 *bhuj* に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるのである。

(C) [答論] もし、[〈行為主体〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されなるとき、その何かに基づく [〈行為主体〉の] 非表示があると考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるとするならば、*odana* に関して第二格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *ktivā* によっては〈目的〉は表示されていない

[3] においては、飲食〈行為〉に対する〈目的〉は *bhujyate* の *-te* によって既表示であるとしても、料理〈行為〉に対する〈目的〉は *paktvā* の *ktivā* によっては未表示である。したがって *odana* の後に第二格接辞の生起が結果し [7] が派生される。この誤謬もまた新規規定によって回避できる。新規規定により、*paktvā* の *ktivā* は *bhujyate* の *-te* が指示する〈目的〉である米粥を指示するとすれば、料理〈行為〉に対する〈目的〉は既表示となるからである。米粥は *bhujyate* の *-te* によって既表示である。

### 3.4 MBh on A 3.4.26 (4)

上記 (3) に続く *Bhāṣya* は、[3] と意味的に等価なその能動文 [5] に関する新規規定の有用性を指摘する。[7] が帰結することを回避するために *ktivā* は〈目的〉を表示することが提案される。

(4) MBh on A 3.4.26 (174.25–175.4): (A) yadi punar ayaṃ karmaṇi vijñāyeta / naivaṃ śakyam / iha hi paktvaudanaṃ bhunkte devadatta ity odane dvitīyā na syāt / kiṃ kāraṇaṃ na syāt / ktvayābhihitam karmeti / (B) nanu ca bhujipratyayenānabhihitam karmeti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dvitīyā / (C) yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dvitīyā devadatte tṛtīyā prāpnoti / kiṃ kāraṇaṃ / ktvayānabhihitaḥ karteti /

「(A) [反論] しかし、もしこの [ktvā 接辞] は〈目的〉を表示すると理解できるとすれば [第二格接辞の生起が結果しない]。

[答論] このように理解することはできない。実に以下の事例、すなわち *paktvaudanaṃ bhunkte devadattaḥ* (デーヴァダッタは米粥を煮てから食べる) においては、*odana* に関して第二格接辞は起こらないことになろう。

[問] どうして起こらないことがあるう。

[答] 接辞 *ktvā* によって〈目的〉はすでに表示されている。

(B) [反論] 動詞語根 *bhuj* に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起こるのであろう。

(C) [答論] もし、[〈目的〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈目的〉の] 非表示があると考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起こるとするならば、*devadatta* に関して第三格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *ktvā* によっては〈行為主体〉は表示されていない

[5] においては、飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉は *bhunkte* の *-te* によっては既表示であるとしても、料理〈行為〉に対する〈行為主体〉は *ktvā* によっては未表示である。したがって、*devadatta* の後に第三格接辞の生起が結果し、以下の文が派生される。

[18] \**paktvaudanaṃ bhunkte devadattena*

新規規定によれば、*ktvā* と *bhunkte* の *-te* は、二つの〈行為〉に〈行為主体〉として参与する同一のデーヴァダッタを指示対象とする。デーヴァダッタは *bhunkte* の *-te* によって既表示である。よって [18] の派生は回避される。

### 3.5 MBh on (5)–(6)

パタンジャリは、続けて以下の A 3.3.10 *tumunṣvulau kriyāyaṃ kriyārthāyām* が導入を規定する *tumun* 接辞で終わる項目が使用される文に関する新規規定の有用性を問題とする。

[19] *bhoktum odanaḥ pacyate devadattena* (「食べるために米粥がデーヴァダッタによって煮られる」)

[20] *bhoktum odanaṃ pacati devadattaḥ* (「食べるために米粥をデーヴァダッタは煮る」)

議論の方向は *ktvā* の場合とまったく同じである。

(5) MBh on A 3.4.26 (II.175.5–9): (A) athānena tumuni arthaḥ / bhoktum odanaḥ pacyate devadatteneti / bādham arthaḥ / devadatte ṛtīyā yathā syāt / kiṃ ca kāraṇam na syāt / tumunābhihitāḥ karteti / (B) nanu ca pacipratyayenānabhihitāḥ karteti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati ṛtīyā / (C) yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati ṛtīyaudane dviṛtīyā prāpnoti / kiṃ kāraṇam / tumunānabhihitam karmeti /

「(A) [反論] この [カーティアーヤナが提案する新規規定] は、*bhoktum odanaḥ pacyate devadattena* (「食べるために米粥がデーヴァダッタによって煮られる」) という *tumun* で終わる項目の領域で有用だろうか<sup>25</sup>。

[答論] 確かに有用である。*devadatta* に関して第三格接辞が起こるために。

[問] しかしどうして起こらないことがある。

[答] *tumun* によって〈行為主体〉はすでに表示されている。

(B) [反論] 動詞語根 *pac* に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるのである。

(C) [答論] もし、[〈行為主体〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈行為主体〉の] 非表示があると考えて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起こるとするならば、*odana* に関して第二格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *tumun* によっては〈目的〉は表示されていない

新規規定に依拠しない場合、[19] に関して以下の文の派生が結果する。

[21] \**bhoktum odanaḥ bhujyate devadattena*

前提は、*tumun* による〈行為主体〉の表示である。

(6) MBh on A 3.4.26 (II.175.9–14): (A) yadi punar ayam karmaṇi vijñāyeta / naivaṃ śakyam / iha hi bhoktum odanaḥ pacati devadatta iti odane dviṛtīyā na syāt / kiṃ kāraṇam / tumunābhihitam karmeti / (B) nanu ca pacipratyayenānabhihitam karmeti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dviṛtīyā / (C) yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati dviṛtīyā devadatte ṛtīyā prāpnoti / kiṃ kāraṇam / tumunānabhihitāḥ karteti /

「(A) [反論] しかし、もしこの [*tumun* 接辞] は〈目的〉を表示すると理解できるとすれば [第二格接辞の生起が結果しない]。

[答論] このように理解することはできない。実に以下の事例、すなわち *bhoktum odanaḥ pacati devadattaḥ* (「食べるために米粥をデーヴァダッタは煮る」) においては、*odana* に関して第二格接辞は起こらないことになる。

[問] どうして起こらないことがある。

[答] 接辞 *tumun* によって〈目的〉はすでに表示されている。

<sup>25</sup>当該事例における *tumun* の導入は以下の規則による。A 3.3.10 *tumunṅvulau kriyāyaṃ kriyārthāyām //* (「〈行為1〉を目的とする〈行為2〉[を表示する動詞語根が] 共起項目であるとき、未来時に属する〈行為1〉を表示する動詞語根の後に、接辞 *tumun* と *ṅvul* が起こる」)

(B) [反論] 動詞語根 *pac* に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考へて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起るであろう。

(C) [答論] もし、[〈目的〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈目的〉の] 非表示があると考へて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第二格接辞が起るとするならば、*devadatta* に関して第三格接辞の生起が結果する。

[問] なぜか。

[答] [当該事例では] *tumun* によっては〈行為主体〉は表示されていない

新規規定に依拠しなければ、[20] に関して以下の文が結果する。

*\*bhoktum odanaṃ pacati devadattena*

前提は、(5) と違って *tumun* による〈目的〉の表示である。

### 3.6 MBh on A 3.4.26 (7)

重要なのは、以下の *Bhāṣya* である。*Bhāṣya* (1)–(6) においてパタンジャリが議論した文はすべて二つの異なる〈行為〉があり、それらに参与する〈行為主体〉も〈目的〉も同一である事態の表現であった。パタンジャリは、二つの異なる〈行為〉があり、それらに参与する〈行為主体〉は同一であっても、その二つの〈行為〉にはそれぞれに異なる〈目的〉が関係する事態の表現に関して、新規規定の有用性を問う。

(7) MBh on A 3.4.26 (II.175.15–19): (A) *athānenēhārthaḥ paktvaudanaṃ grāmo gamyate devadatteneti / bādham arthaḥ / devadatte tṛtīyā yathā syāt / kiṃ ca kāraṇaṃ na syāt / ktvayābhīhitaḥ karteti /*  
(B) *nanu ca gamipratyayenānabhihitaḥ karteti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati tṛtīyā /*

(C) *yadi saty abhidhāne cānabhidhāne ca kutaścid anabhidhānam iti kṛtvānabhihitāśrayo vidhir bhaviṣyati tṛtīyā yad uktam odane dvitīyā prāpnotīti sa iha doṣo na jāyate /*

「(A) [反論] この [カーティアーヤナが提案する新規規定] は、*paktvaudanaṃ grāmo gamyate devadattena* (「デーヴァダッタは、米粥を煮て、村に行く」) においては有用だろうか。

[答論] 確かに有用である。*devadatta* に関して第三格接辞が起るように。

[問] どうして起らないことがあるか。

[答] *ktvā* によって〈行為主体〉はすでに表示されている。

(B) [反論] 動詞語根 *gam* (「進行する」) に後続する接辞によって〈行為主体〉はいまだ表示されていないと考へて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起るであろう。

(C) [答論] もし、[〈行為主体〉は] 何かに基づいては表示され、何かに基づいては表示されないとき、その何かに基づく [〈行為主体〉の] 非表示があると考へて、A 2.3.1 *anabhihite* (「表示されていない」) に依拠して導入されるものとして第三格接辞が起るとするならば、*odana* に関して第二格接辞の生起が結果すると言われたことはこの事例では誤謬とはならない<sup>26</sup>」

<sup>26</sup> カイヤタは、当該 *Bhāṣya* (7) は異なる動詞語根の意味である異なる〈行為〉を対象とする〈目的〉に差異がある場合にも新規規定が有用であるかどうかを示すために提示されていると説明している。Pradīpa on MBh to A 3.4.32 (III.384): *athāneneti / ā ca tumuna ity anena vacanenety arthaḥ / anekaprayojanatvam asya vacanasya pras-nadvāreṇa darśayati / paktvaudanaṃ iti / bhinnadhātvarthaviṣayakarmabhede 'pi vacanasyaśya darśayitum prayo-janam upanyāsaḥ /*

以下の文が議論されている。

[22] *paktvaudanam grāmo gamyate devadattena = paktvā odanam grāmaḥ gamyate devadattena*  
 (「デーヴァダッタは、米粥を煮て、村に行く」)

[22] においては、同一のデーヴァダッタが *paktvā* の動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉と *gamyate* の動詞語根 *gam* が表示する進行〈行為〉に〈行為主体〉として参与するが、その料理〈行為〉の〈目的〉は米粥、進行〈行為〉の〈目的〉は村であり、二つの〈行為〉に対する〈目的〉の同一性はない。さらに、定動詞形 *gamyate* の *-te* は村を指示して、村を〈目的〉として表示している。

議論 [A] は、*paktvā* の *ktvā* は〈行為主体〉を表示するという前提を立てる。この前提では、*ktvā* によって料理〈行為〉の〈行為主体〉は既表示となり、*devadatta* の後への第三格接辞導入はできないとされる。したがって新規規定が要請される。*ktvā* が *gamyate* の *-te* が指示する進行〈行為〉に対する〈目的〉である〈村〉を指示するならば、*ktvā* による料理〈行為〉に対する〈行為主体〉の未表示が確立される。そしてこの *ktvā* による料理〈行為〉に対する〈行為主体〉の未表示に依拠するならば、*devadatta* の後への第三格接辞の導入は可能であるとする。

議論 [B] は、*devadatta* の後への第三格接辞の導入の根拠を *ktvā* ではなく *gamyate* の *-te* による〈行為主体〉の未表示に求める。議論 [B] の論理は、「*kāraka* の *x* による表示と *y* による非表示があるとき、*y* による非表示に依拠して、その *kāraka* を表示するために *kāraka* 接辞が起こる」という論理に他ならない。この論理は例えば *Bhāṣya* (3) においては [3] における *odana* への第二格接辞導入を帰結させた。*Bhāṣya* (3) では、*bhujyate* の *-te* によつては飲食〈行為〉に対する〈目的〉は既表示であるとしても、*ktvā* によつては料理〈行為〉の〈目的〉は未表示であるとされるからである。そしてこのことが新規規定要請の理由であった。

議論 [C] は、この論理が [22] を正当化する論理となることを指摘する。[22] においては、*gamyate* の *-te* による進行〈行為〉に対する〈目的〉の既表示があり、*ktvā* による料理〈行為〉に対する〈目的〉の未表示がある。この *ktvā* による料理〈行為〉に対する〈目的〉の未表示こそが *odana* の後への第二格接辞の導入を可能とする。そしてこの事例においてそれは望ましい (*iṣṭi*)。このことは、新規規定が [22] において無効であることを示す。逆に新規規定によれば、この事例において、*ktvā* は *gamyate* の *-te* が指示する村を指示するとみなされ、*ktvā* による料理〈行為〉の〈目的〉の既表示が結果する。この場合、*odana* の後への第二格接辞の導入は不可能となる<sup>27</sup>。

### 3.7 MBh on A 3.4.26 (8)

パタンジャリは、以上のようにカーティアーヤナが提案する新規規定の適用領域が、二つの異なる〈行為〉に相関する〈行為主体〉と〈目的〉が同一である領域に制限されることを明らかにした上で、最終的に、その適用領域においても新規規定は必要とされないことを確定見解として提示する。パタンジャリによれば、不変化詞 *kṛt* から〈行為主体〉と〈目的〉表示の可能性を排除し、それらの表示対象を *bhāva* (〈行為〉) とすることによって不変化詞 *kṛt* が使用される [14] 等の文における名詞接辞の導入は合理的に説明できる。彼は以下のように述べる。

<sup>27</sup>ナーゲーシャによれば、新規規定の「同一指示対象」(*samānadhikraṇa*) の *samāna* は「同種」を意味せず、「単一」(*eka*) と同義語である。よつて、[22] のように〈行為主体〉は単一であっても、〈目的〉は単一でない場合、そもそも新規規定は適用されない。Uddyota on MBh to A 3.4.32 (III.383–384): *bhinnadhātvartheti / pāke odanaḥ, gamane grāma ity arthaḥ / asya vacanasya prayojanaṃ darśayitum ity anvayaḥ / bhāṣye sa iha doṣo na jāyata iti / nanv anabhihitāśrayā tṛtīyā siddhā, dvitīyāpṛāptirūpo doṣaś ca na, tat kim atra prayojanaṃ iti prayojanaṃ darśayitum upanyāsa iti kaiyaṭāsaṅgatir iti cet, atra vadanti—darśayitum iti kaiyaṭasya vicārayitum ity arthaḥ / sa doṣa iha na jāyate tasmān nārtha etadudāharaṇaviṣaye iti bhāṣyārthaḥ / yadi pravarteta tadaitatprayogābhāvarūpam aniṣṭaṅ ca syāt / tasmāt samānaśabda ekaparyāya iti tātparyam /*



(8) MBh on A 3.4.26 (II.174.20–22): tat tarhi vaktavyam ā ca tumunaḥ samānādhikaraṇa iti / na vaktavyam / avyayakṛtaḥ bhāve bhavanti bhāve bhaviṣyanti / kiṃ vaktavyam etat / na hi / katham anucyamānaṃ gaṃsyate / tumartha iti vartate / tumarthaś ca kaḥ / bhāvaḥ //

「[反論] それでは、その [新規規定] 「さらに、[A 3.4.65 までの規則が導入を規定する接辞は、[追使用項目と] 指示対象を同じくする場合に起こる、という新規規定が定式化されるべきである」は、[異なる動詞語根の表示する〈行為〉] に対する *kāra* に同一性がある領域に関して] 定式化されるべきである。

[答論] 定式化される必要はない。不変化詞 *kṛt* は、*bhāva* (〈行為〉) を表示するために起こるから、[A 3.4.65 までの規則が導入を規定する接辞は] *bhāva* (〈行為〉) を表示するであろう。

[問] このことは定式化されるべきではないか。

[答] 実に定式化される必要はない。

[問] どうして言明されていないのに理解し得よう。

[答] [A 3.4.9 から] *tumarthe* が継起する。

[問] しかし、*tum(un)* 接辞の意味とは何か。

[答] *bhāva* (〈行為〉) である」

パタンジャリは、不変化詞 *kṛt* は *bhāva* (〈行為〉) を表示するとすることによって、カーティアヤーナが新規規定の必要性を主張する根拠となった問題は解決されるとする。しかし、パタンジャリはここにおいてどのように解決されるのかを明言しない。その解決の論理こそがバルトリハリが当該 VP 3.7.81–86 の詩節で明らかにするものである<sup>28</sup>。

#### 4 avyayakṛt

以下の規則によって、不変化詞 *kṛt* である *ktvā* や *tumun* で終わる項目は *avyaya* と呼ばれる。

A 1.1.39 *kṛn mejanataḥ* // (「*m* 音で終わる *kṛt* 接辞、*ec* (*e, o, ai, au* 音) で終わる *kṛt* 接辞、それらの *kṛt* 接辞で終わる項目は、*avyaya* と呼ばれる」)

A 1.1.40 *ktvātosunkasunaḥ* // (「接辞 *ktvā*、*tosun*、*kasun* で終わる項目は、*avyaya* と呼ばれる」)

そして不変化詞 *kṛt* が *bhāva* (〈行為〉) を表示することは、以下の *Bhāṣya* において確立される。

<sup>28</sup> カイヤタは、バルトリハリが提示する論理に基づいて当該 *Bhāṣya* を以下のように説明している。Pradīpa on MBh to A 3.4.26 (III.384–385): *avyayakṛta iti / yady evaṃ paktvaudanaṃ bhūṅkte devadattaḥ paktvaudano bhujyate devadatteneti ktvāpratyayena kartṛkarmanor anabhidhānāt pākāpekṣayā tṛṭīyādviṭīye kasmān na bhavataḥ / ucyate / ākhyātātipadavācyā kriyā viśeṣyatvāt pradhānam / viśeṣanabhūtā tv apradhānam / tatkriyāsādhanyor api śaktyos taddvārako guṇapradhānabhāvaḥ / tatra pradhānaśaktyabhidhāne guṇakriyāsaktir abhihitavat prakāśate / pradhānānurodhād guṇānām tanmukhapreṣitvāt pṛthaktvād viruddhasvakāryārambhābhāvāt* // (「*avyayakṛtaḥ* (「不変化詞 *kṛt* は」) に関して: [問] もしそうなら、*pektvaudanaṃ bhūṅkte devadattaḥ*、*pektvaudano bhujyate devadattena* において *ktvā* 接辞は〈行為主体〉と〈目的〉を表示しないから、料理〈行為〉に相関してどうして第三格接辞と第二格接辞が生起しないのか。[答] 答えよう。定動詞形等の統語項目 (*pada*) が表示する〈行為〉は、[文意における] 被限定者 (*viśeṣya*) であるから、主要素である。一方、限定者 (*viśeṣaṇa*) である [〈行為〉] は非主要素である。それら [二つの] 〈行為〉を実現する二つの能力の間にも、それら [の〈行為〉] を通じて主従関係が成立する。それらのうち、主要能力が表示されるとき、従属能力はすでに表示されているかのように顕現する。従属要素は主要素に従うからそれら [主要素] の顔色を伺うものだからであり、[主要素と] 異なるものだからといって [主要素の文法操作と] 矛盾する自己の文法操作を発効せしめるものではないからである」)

MBh on A 3.4.9 (II.171.9–17): tumartha ity ucyate kas tumarthaḥ / kartā / yady evaṃ nārthas tumarthagrahaṇena / yenaiva khalv api hetunā kartari tumun bhavati tenaiva hetunā sayādayo 'pi bhaviṣyanti / evaṃ tarhi siddhe sati yat tumarthagrahaṇaṃ karoti taj jñāpayaty ācāryo 'sty anyaḥ kartus tumuno 'rtha iti / kaḥ punar asau / bhāvaḥ / kuto nu khalv etad bhāve tumun bhaviṣyati na punaḥ karmādiṣu kārakeṣv iti / jñāpakād ayaṃ kartur apakṛṣyate / na cānyasiminn artha ādiśyate 'anirdiṣṭārthāś ca pratyayāḥ svārthe bhavanṭīti svārthe bhaviṣyati / tadyathā—guptijikidbhyaḥ san yāvādibhyaḥ kan iti / so 'sau svārthe bhavan bhāve bhaviṣyati // kim etasya jñāpane prayojanam / avyayakṛto bhāve bhavanṭīty etan na vaktavyaṃ bhavati //

〔問〕〔当該規則 A 3.4.9 tumarthe sesenase'asenksekasenadhyaiadhyainkadhyaiakadhyainśadhyaiśadhyaintavaitaventavenaḥ においては〕 *tumarthe* と述べられている<sup>29</sup>。 *tum(un)* の意味は何か。

〔答〕〔A 3.4.67 kartari kṛt により〕〈行為主体〉である。

〔反論〕もしそうなら、〔ここに〕 *tumartha* と言及する必要はない。実にある根拠から *tumun* が〈行為主体〉を表示するために起こるなら、その同じ根拠から、*se* 等の接辞も〔〈行為主体〉を表示するために〕起こるのであろう。

〔難点回避〕もしそうなら、その場合、〔*se* 等の接辞が〈行為主体〉を表示することが〕確立されているとき *tumartha* という言及をなしているから、師〔パーニニは〕 *tumun* には〈行為主体〉とは別の意味があるということを示唆している。

〔問〕しかしこの〔〈行為主体〉とは別の意味とは〕何か。

〔答〕 *bhāva* (〈行為〉) である。

〔問〕一体全体、*tumun* は *bhāva* (〈行為〉) を表示するために起こるが、〈目的〉等の *kāraka* を表示するためには起こらないであろうというこのことがどうして言えるのか。

〔答〕〔A 3.4.9 における *tumartha* の言及という〕指標 (*jñāpaka*) から、この〈行為主体〉は排除される。そして、〔*tumun* が〈行為主体〉とは〕別の意味を表示するために起こることは教示されていない。その意味の特定されていない接辞は、自己が添加される基体 (*prakṛti*) の意味 (*svārtha*) を表示するから、〔*tumun* は〕自己が添加される基体の意味を表示するために起こるのであろう<sup>30</sup>。例えば、A 3.1.5 *guptijikidbhyaḥ san* が導入を規定する *san*、A 5.4.29 *yāvādibhyaḥ kan* が導入を規定する *kan* が自己が添加される基体の意味を表示するために起こるように<sup>31</sup>。ここに問題となっているその〔*tumun* は〕自己が添加される基体の意味を表示するために起こるから、*bhāva* (〈行為〉) を表示するために起こるのであろう。

〔問〕このことを示唆することにおける目的は何か。

〔答〕不変化詞 *kṛt* は *bhāva* (〈行為〉) を表示するために起こる、というこのことが定式化される必要はない」

このように、不変化詞 *kṛt* は自己が添加される基体である動詞語根の意味である〈行為〉 (*bhāva*) を表示し、*kāraka* を表示しない。カーティアーヤナの新規規定提案は、不変化詞 *kṛt* が〈行為主

<sup>29</sup>A 3.4.9 は、ヴェーダの領域で以下の *kṛt* 接辞が *tumun* の意味を表示するために起こることを規定する。  
*se sen ase asen kse kasen adhyai adhyain kadhyai kadhyain śadhyai śadhyain tavai taveṇ taven*

<sup>30</sup>PIŚ 121: *anirdiṣṭārthā pratyayāḥ svārthe //* ナーゲーシャによれば、その意味が基体 (*prakṛti*) によって理解せしめられるもの (*pratyāyate*) もまた「接辞」 (*pratyaya*) であり、「自己の意味」 (*svārtha*) とは自己の基体の意味 (*svīyaprakṛtyartha*) である。Nāgeśa on PIŚ 121: *yasyārthaḥ prakṛtyā pratyāyate so 'pi pratyaya ity asyāpy aṅgikārāt tasya pratyayatvam iti na doṣaḥ/ svārtha ityasya svīyaprakṛtyartha ity arthaḥ /*

<sup>31</sup>A 3.1.5 は、動詞語根 *gup*、*tij*、*kit* の後に接辞 *san* が起こることを規定する。*jugupsate* (「彼は非難する」*gup-san*—動詞語根 *gup* には「守護」ではなく「非難」の意味が想定される) また A 5.4.29 は、*yāva* 群の項目の後に接辞 *kan* が起こることを規定する。*yāva = yāvaka* (「大麦粉で作った食べ物」)

体)・〈目的〉という *kāraka* を表示することを前提に、不変化詞 *kṛt* に追使用項目である定動詞形の定動詞接辞との同一対象指示性を与えるものであったことが想起されるべきである。

## 5 VP 3.7.81–83

以下に、バルトリハリの不変化詞 *kṛt* は *bhāva* (〈行為〉) を表示するというパタンジャリの見解に基づいた [3] 等の文の正当化の論理を見ていこう。

### 5.1 VP 3.7.81

VP 3.7.81 において、バルトリハリは [3] に関して、以下の分析をしている。論点は以下のとおりである。

1. [3] が二つの動詞語根によって言及する二つの〈行為〉の間には主従関係 (*guṇapradhānabhava*) がある。すなわち、二つの〈行為〉は一方が主要なる〈行為〉であり、他方がそれに従属する〈行為〉である。このことは、文の意味 (*vākyārtha*) が語意 (*padārtha*) 間の限定関係 (*viśeṣaṇaviśeṣyabhāva*) であることを示唆する。
2. *kāraka* には *kāraka* として機能する能力 (*śakti*) の相とその能力の保持者である実体 (*dravya*) の相がある。
3. 実体として同一の *kāraka* であるデーヴァダッタは、動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉を実現するそれに対して〈行為主体〉として機能する能力と動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉を実現するそれに対して〈行為主体〉として機能する能力を有する。これら二つの能力は相互に異なる (*prthak*)。同一の実体に異なる能力が想定されるとき、その想定的前提には能力と能力保持者間の差異がある。二つの〈行為〉の〈行為主体〉の同一性は実体としての同一性によって保障される。
4. 同じく実体として同一の *kāraka* である米粥は、動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉を実現するそれに対して〈目的〉として機能する能力と動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉を実現するそれに対して〈目的〉として機能する能力を有する。これらの二つの能力も相互に異なる。
5. 一方の能力は、主要〈行為〉を抛り所とする能力 (*guṇāśraya śaktiḥ*) であり、他方の能力は、従属〈行為〉を抛り所とする能力である。
6. 従属〈行為〉を抛り所とする能力は、主要〈行為〉を抛り所とする能力に従う (*pradhānam anurudhyate*)。

パタンジャリによれば、*kāraka* は〈行為〉を実現する能力として捉えられ、さらにその能力の保持者である実体としても捉えられる<sup>32</sup>。同一の実体であるデーヴァダッタと米粥は、それぞれ、主要〈行為〉を抛り所とする、主要な〈行為主体〉能力と主要な〈目的〉能力を有し、従属〈行為〉を抛り所とする、従属的な〈行為主体〉能力と従属的な〈目的〉能力を有する。そして、従属的な〈行為主体〉能力と従属的な〈目的〉能力の表示の有り様は主要な〈行為主体〉能力と主要な〈目的〉能力の表示の有り様に従う。

<sup>32</sup>本論注9を見よ。

## 5.2 VP 3.7.82

VP 3.7.82 の論点は以下のとおりである。

1. [1]においては、接辞 (pratyaya) によって、主要〈行為〉を対象とする〈能力〉 (pradhānaviṣayā śaktiḥ) が表示される (abhidhīyate)。
2. VP 3.7.83 は *ktvā* は *bhāva* (〈行為〉) を表示するとする。このことから、*ktvā* は能力としての *kāraka* を表示しないことが前提されている。よって、当該詩節の「接辞」は定動詞接辞を指示している。したがって、主要〈行為〉は定動詞形 *bhujyate* の動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉であり、定動詞接辞 *-te* は、その〈行為〉に 관련된 〈目的〉能力を表示する。
3. 定動詞形 *bhujyate* の動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉と *paktvā* の動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉の間に主従関係が成立する。このことは、文意論の観点から言えば、料理〈行為〉が飲食〈行為〉に対して限定者 (*viśeṣaṇa*) として機能し、飲食〈行為〉が料理〈行為〉に対して被限定者 (*viśeṣya*) の地位を有することを示す。
4. 定動詞形 *bhujyate* の *-te* によって、主要〈行為〉である飲食〈行為〉を対象とする、米粥の〈目的〉能力が表示されるとき、従属〈行為〉である料理〈行為〉を対象とする、米粥の〈目的〉能力は、実際には *ktvā* によって表示される可能性はないにもかかわらず (*anuktāpi*)、あたかもすでに表示されているかのように (*tadvat*) 顕現する (*prakāśate*)。 *ktvā* は *kāraka* を表示しない。

## 5.3 VP 3.7.83

VP 3.7.83 には d 句に関して Rau が与える読みと Iyer の与える読みが異なるという問題がある。

Rau: *pacāv anuktaṃ yat karma ktvānte bhāvābhidhāyini /*  
*bhujau śaktyantare 'py ukte tat taddharma prakāśate //*

Iyer: *pacāv anuktaṃ yat karma ktvānte bhāvābhidhāyini /*  
*bhujau śaktyantare 'py ukte tat taddharmaḥ prakāśate //*

まずもって、a 句の *karma* は属性主要表示 (*bhāvapradhānanirdeśa*) であり、*karmatva* (〈目的〉性) という属性 (*bhāva*) を表示する。それが指示するのは〈目的〉能力である。Rau は、*taddharma* を *tad* と *dharman* の *bahuvrīhi* と解する。この場合、「それ (*tat*) すなわち〈目的〉は、そのもつ属性と類似の属性を有するものとして (*tasya iva dharma asya*) 顕現する」という意味となる。「そのもつ属性」とは、*bhujyate* の動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力がもつ既表示という属性である。ただし、ヘーラーラージャの注釈はこの読みを支持しない。

Iyer はヘーラーラージャの注釈に従っている。*taddharmaḥ* の *tad* が指示するのは、料理〈行為〉という従属〈行為〉に相関する〈目的〉能力である。その〈目的〉能力の属性とは、主要なる飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力がもつ既表示の属性に類似した属性、擬似既表示属性である。なお、*tat* は不変化詞であり、「それゆえ」という帰結を示す<sup>33</sup>。

すでに VP 3.7.82 において、定動詞接辞によって定動詞接辞が後続する動詞語根が表示する主要〈行為〉に対する〈目的〉能力が表示されるときには、*ktvā* で終わる項目が表示する従属〈行為〉に対する〈目的〉能力はすでに表示されているかのように顕現することが指摘されている。Rau の

<sup>33</sup>当該詩節の解釈上のさらなる問題については翻訳研究を参照せよ。

読みは、VP 3.7.83 において、具体例を挙げてそれを説明していることになる。その意味では VP 3.7.83 は新規情報を与えないことになる。

VP 3.7.82ab 句においては、定動詞接辞による主要〈行為〉に対する〈目的〉能力の表示が述べられた。対して VP 3.7.83ab 句においては、*ktivā* による *bhāva* (〈行為〉) の表示と従属〈行為〉に対する〈目的〉能力の非表示が述べられている。本詩節において初めて *ktivā* が *bhāva* (〈行為〉) を表示して *kāraka* を表示しないことが明らかとなる。バルトリハリは、*ktivā* は *bhāva* (〈行為〉) を表示すると述べることによって、*ktivā* で終わる項目が表示する従属〈行為〉に対する〈目的〉能力がすでに表示されているかのように顕現することの根拠が、*ktivā* が *kāraka* ではなく、*bhāva* (〈行為〉) を表示する点にあることを示そうとしているのである。蓋し、Iyer の読みが採用されるべきである。

Iyer の読みを前提として、VP 3.7.83 の論点は以下のようにまとめることができる。

1. *ktivā* は *bhāva* (〈行為〉) を表示する。
2. よって、*ktivā* によって料理〈行為〉に対する〈目的〉能力は表示されない (*anukta*)。
3. *ktivā* によって料理〈行為〉に対する〈目的〉能力が表示されないからこそ、その〈目的〉能力とは異なるとしても、飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力が *bhujyate* の *-te* によって表示されたときに、飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力がもつ既表示属性と類似した擬似既表示属性が顕現する。*ktivā* によって料理〈行為〉に対する〈目的〉能力が表示されるとするならば、その〈目的〉能力は擬似既表示属性を持ち得ない。持ち得る属性は真正既表示属性である<sup>34</sup>。

#### 5.4 VP 3.7.84

本詩節は、[4] を問題とする。本詩節は、以下の *Bhāṣya* の議論を踏まえたものである。パタンジャリは、A 3.1.7 *dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyām vā* に対する *Bhāṣya* において次のように述べている。

MBh on A 3.1.7 (II.15.8–11): *atheha grāmaṃ gantum icchatīti kasya kiṃ karma / iṣer ubhe karmaṇī / yady evaṃ grāmaṃ gantum icchati grāmāya gantum icchatīti gatyarthakarmaṇī dvitīyācaturthau na prāpnutaḥ / evaṃ tarhi gamer grāmaḥ karmeṣer gamiḥ karma / evam api iṣyate grāmo gantum iti parasādhana utpadyamānena lena grāmasyābhidhānaṃ na prāpnoti / evaṃ tarhi gamer grāmaḥ karmeṣer ubhe karmaṇī //*

「[問] さて、次の事例 *grāmaṃ gantum icchati* (「彼は村に行こうと欲する」) においては、何が何の〈目的〉か。

[答] [村と進行〈行為〉の] 両者が動詞語根 *iṣ* (「欲求する」) [が表示する欲求〈行為〉] の〈目的〉である。

[反論] もしそうなら、*grāmaṃ gantum icchati*、*grāmāya gantum icchati* (「彼は村に行こうと欲する」) において、[村は欲求〈行為〉の〈目的〉であって進行〈行為〉の〈目的〉ではないから、A 2.3.12 は適用されず、] 進行〈行為〉の〈目的〉が表示されるべきとき、第二格接辞と第四格接辞は結果しない<sup>35</sup>。

<sup>34</sup> 翻訳研究注 59 を見よ。

<sup>35</sup> A 2.3.12 *gatyarthakarmaṇī dvitīyācaturthyau ceṣṭāyām anadhvani //* (「進行〈行為〉を意味する動詞語根の〈目的〉が表示されるべきとき、もしその〈目的〉が他の項目によって表示されていないならば、この〈目的〉が道以外のものであり、その進行〈行為〉が動作を伴うものであるという条件で、第二格接辞あるいは第四格接辞が起こる」)

[難点回避] もしそうならその場合、動詞語根 *gam* [が表示する進行〈行為〉] にとっては村が〈目的〉であり、動詞語根 *iṣ* [が表示する欲求〈行為〉] にとっては進行〈行為〉が〈目的〉である。

[反論] このようであるとしても、*iṣyate grāmo gantum* (「村が行こうと欲される」) において、他方の [動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉の] 〈能成者〉の表示のために起こる *I* 接辞による村の表示は結果しない。[この場合 *I* 接辞が表示する〈能成者〉は進行〈行為〉であって村ではない。]

[難点回避] もしそうなら、その場合、動詞語根 *gam* [が表示する進行〈行為〉] にとっては、村が〈目的〉であり、動詞語根 *iṣ* [が表示する欲求〈行為〉] にとっては、[村と進行〈行為〉の] 両者が〈目的〉である」

重要な点は、[4] においては、動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉 (*icchā*) は、村を〈目的〉とする進行〈行為〉を〈目的〉とするということである。村を〈目的〉とする進行〈行為〉とは、換言すれば、村と〈行為〉と *kāraka* の関係 (*kriyākārahāva*) で関係する進行〈行為〉すなわち村に限定された進行〈行為〉である。この意味で動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉は、「村と進行〈行為〉の両者を〈目的〉とする」と言われる。[4] は、定動詞形が表示する〈行為〉の〈目的〉であるものが不変化詞 *krt* が表示する〈行為〉とその〈行為〉に参加する〈目的〉の両者であるという点で、[1] と [3] と異なる。

VP 3.7.84 の論点は以下のとおりである。

1. 欲求〈行為〉は、進行〈行為〉との関係を通じて村を対象とする。このことは、*grāmam icchati* (「彼は村を欲する」)、*grāma iṣyate* (「村が欲される」) という場合とは異なって、動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉は、村に限定された進行〈行為〉を〈目的〉とすることを示す。
2. [4] における *iṣyate* の *-te* によっては、村に限定された進行〈行為〉が〈目的〉として表示される。この場合、この定動詞接辞によって、村もまた動詞語根 *iṣ* が表示する欲求〈行為〉に対する〈目的〉として表示される。
3. 村が定動詞形である *iṣyate* の動詞語根 *iṣ* が表示する主要〈行為〉である欲求〈行為〉に対する〈目的〉として *iṣyate* の *-te* によって表示されるとき、その村は、*gantum* の動詞語根 *gam* が表示する従属〈行為〉である進行〈行為〉に対する〈目的〉としてすでに表示されているかのように顕現する。

ちなみに、*tumun* で終わる *gantum* はすでに述べたように A 1.1.39 により *avyaya* と呼ばれるから、A 2.4.82 *avyayād āpsupaḥ* によりその後導入される名詞接辞はゼロ化されて現実化しない<sup>36</sup>。

#### 5.4.1

ところで、カイヤタは、パタンジャリの最終的難点回避をバルトリハリの論理をもって次のように説明している。

Pradīpa on MBh to A 3.1.8 (III.44): *iṣyate grāmo gantum ity atra gamanasya grāmārthatvād aprādhānyād bhinnakakṣayoḥ karmaṇor ekena śabdenābhidhānāsambhavāt pradhāne kāryasampratyayād grāmasyaivābhidhānaṃ lakāreṇa bhavati / iṣikriyāyās cākhyātavācyatvāt prādhānyam iti*

<sup>36</sup>A 2.4.82 は、*avyaya* と呼ばれる項目の後に導入される女性接辞 *āp* と名詞接辞 (*sup*) にはゼロが代置されることを規定する。

pradhānakriyāśaktyabhidhāne guṇakriyāśakter abhihitavaccakāsanād gamikriyāpekṣe dvitīyācaturtyau na bhavataḥ /

「*iṣayte grāmo gantum* というこの [文] においては、進行行為は村を目的とするから、[村に相関して] 非主要である。したがって、[主要・非主要というように] 地位が異なる二つの〈目的〉が一つの言語項目によって表示されることはあり得ないから、[そして] 主要素に関して文法操作が起こると理解されるから、まさに [主要素である] 村が *I* 接辞によって表示される。そして、[動詞語根 *iṣ* が表示する] 欲求〈行為〉は、[*iṣyate* という] 定動詞形 (*ākhyāta*) の表示対象であるから、[接辞 *tumun* で終わる *gantum* が表示する進行〈行為〉に相関して] 主要素である。したがって、主要〈行為〉に対する能力が表示される時、従属〈行為〉に対する能力は、すでに表示されているかのように顕現するから、進行〈行為〉に相関して第二格接辞と第四格接辞が起こることはない<sup>37)</sup>」

カイヤタの分析は以下のとおりである。(1) 村を〈目的〉とする進行〈行為〉は、村に対して、ものの在り方としては、非主要素である。(2) 欲求〈行為〉が村を〈目的〉とする進行〈行為〉を〈目的〉とする時、主要素である村と非主要素である進行〈行為〉が一つの言語項目によって表示されることはない。(3) 文法操作は主要素と非主要素があるとき主要素に関して起こる。(4) よって、*iṣayte* の *-te* によっては主要素である村が〈目的〉として表示される。(5) 定動詞形 *iṣyate* が表示する欲求〈行為〉は、接辞 *tumun* で終わる *gantum* が表示する進行〈行為〉に対して主要素である。(6) 村の欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力が *iṣayte* の *-te* によって表示されたとき、同じ村の進行〈行為〉に対する〈目的〉能力は、すでに表示されているかのように顕現する。

ものの在り方としては、欲求〈行為〉は欲求対象である進行〈行為〉に従属する。しかし、文意の観点からは、定動詞形である *iṣyate* が表示する欲求〈行為〉に主要性がある。主要〈行為〉である欲求〈行為〉は、村と従属〈行為〉である進行〈行為〉という二つの〈目的〉を有する。そして村には欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力と進行〈行為〉に対する〈目的〉能力がある。村の欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力は主要〈行為〉に対する能力であり、進行〈行為〉に対する〈目的〉能力は従属〈行為〉に対する能力である。

ヘーラーラージャもまた、村のもつ欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力が *iṣyate* の *-te* によって表示され、進行〈行為〉の欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力があたかも表示されているかのように顕現するとする<sup>38)</sup>。しかし彼は、カイヤタと違って、その定動詞接辞 *-te* が村の〈目的〉能力と進行〈行為〉の〈目的〉能力という、欲求〈行為〉に対する二つの〈目的〉能力を表示することを認める<sup>39)</sup>。ヘーラーラージャによれば、このことが *iṣayte* の *-te* によって欲求〈行為〉に対する村の〈目的〉能力が表示される理由である。

## 5.5 VP 3.7.85

VP 3.7.85 は、[3] に関する別の文法家達の正当化の論理を提示する。論点は以下のとおりである。

1. *paktvā* の動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉は、米粥を期待しない (*odanaṃ na vyapekṣate pacatiḥ*)。このことは、米粥には、飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力と料理〈行為〉に対する〈目的〉能力という二つの異なる能力が想定されないことを示す。この点が、先行見解と異なる点である。

<sup>37)</sup> 村の進行〈行為〉に対する〈目的〉能力が未表示であるとすれば、A 2.3.12 が適用されることになる。

<sup>38)</sup> VP 3.7.81.4 を見よ。

<sup>39)</sup> VP 3.7.84.6 を見よ。

2. よって、[3]では *odanaḥ bhujyate*（「米粥が食べられる」）が一つの完結体である。[3]からは文の意味を構成するものとして米粥が〈行為〉と *kāra* の関係で料理〈行為〉に関係することは理解されない。
3. *paktvā* によって「何を煮た後か」料理〈行為〉の〈目的〉が期待される。
4. その料理〈行為〉の〈目的〉は推理によって理解される。この場合の推理は、飲食〈行為〉は料理〈行為〉に先行される、米粥の飲食〈行為〉がある、よってそれは米粥の料理〈行為〉に先行される、というものである。飲食〈行為〉の〈目的〉として理解された米粥が料理〈行為〉の〈目的〉としてこの推理から理解される。

この VP 3.7.85 に提示された見解は、ハラダッタに踏襲される。彼は次のように述べている。

Padamañjarī on KV to A 3.4.26: *vayaṃ tu brūmaḥ / sakṛt śrutasya yugapad ubhābhyāṃ sambandhābhāvād ekenaiva pradhānena śābdo 'nvaya iti / itareṇa tu sannidhānād ārtha iti //*

「しかし我々は次のように主張する。一度しか明言されていないものは、同時に二者と関係することはできないから、まさに一方の主要なるものと言葉から理解される限りのレベルで結合する。一方、他方のものとの結合は、[*paktvā* と *odanaḥ* の] 近接関係 (*sannidhāna*) に基づき、言葉から理解される意味に基づく (*ārtha*)<sup>40</sup>」

このハラダッタの主張は、ナーゲーシャによって否定されている。

Uddyota on MBh to A 3.4.26 (III.385): *yat tu haradattena vayaṃ tu brūmaḥ—sakṛcchrutasya yugapad ubhābhyāṃ sambandhābhāvād ekenaiva pradhānena śābdo 'nvayaḥ, itareṇa tu sannidhānād ārtha iti guṇanirūpitā śaktis tatra nāsty evety uktaṃ, tan na, grāmāya gantum icchatīti sansūtrasthabhāṣyaprayogavirodhāpatteḥ, grāmasya gatikarmatvābhāvena caturthyapṛapteḥ /*

*mama tu śābdānvayābhāve 'pi tannirūpitakarmatvasya sattvena paratvād gatyarthakarmanīty asya pravṛtītyā na doṣaḥ / evaṃ grāmāya gatvā drakṣyatīty api sādhv iti dik //*

「しかし、ハラダッタは以下のように主張した。『しかし我々は次のように主張する。一度しか明言されていないものは、同時に二者と関係することはできないから、まさに一方の主要なるものと言葉から理解される限りのレベルで結合する。一方、他方のものとの結合は、[*paktvā* と *odanaḥ* の] 近接関係に基づき、言葉から理解される意味に基づく。したがって、従属 [〈行為〉] に条件付けられた能力は、その [一度しか明言されていないもの] にはまさに存在しない』と。この主張は受け入れられない。*grāmāya gantum icchati* という接辞 *san* の導入規則に関する *Bhāṣya* [におけるパタンジャリ] の言語使用との矛盾が帰結するから<sup>41</sup>。村は進行〈行為〉の〈目的〉ではないから、第四格接辞が結果しないからである。しかし私の見解では、言葉から理解されるレベルでの結合はないとしたとしても、[村には] その [進行〈行為〉] に条件付けられた〈目的〉性が存在するから、[A 2.3.2 に対する A 2.3.12 の] 規則後続性に基づいて、A 2.3.12 が適用されるから、誤謬はない。同様に、*grāmāya gatvā drakṣyati*（「彼は村に行って見るであろう」）も正しい言語運用である。以上これが議論の一般的方向である」

ナーゲーシャの論点は以下のとおりである。*grāmāya gantum icchati* においては、村に欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力のみを認め、進行〈行為〉に対する〈目的〉能力を認めない場合、A 2.3.12

<sup>40</sup>この文脈での *ārtha* は言葉から理解される意味 (*śabdārtha*) を意図している。事実としてのものの在り方 (*vastvārtha*) を意図した *ārtha* がヘーラーラージャによって使用されている。VP 3.7.84.3 を見よ。

<sup>41</sup>MBh on A 3.1.7 (本論 5.4) を見よ。



による *grāmāya* の後への第四格接辞導入が不可能となり<sup>42</sup>、*grāmāya gatvā drakṣyati* においては、村に動詞語根 *drś* が表示する見る〈行為〉に対する〈目的〉能力のみを認め、進行〈行為〉に対する〈目的〉能力を認めない場合、同じように A 2.3.12 による *grāmāya* の後への第四格接辞導入が不可能となる。しかし、*gantum · gatvā* の動詞語根 *gam* が表示する進行〈行為〉に対する〈目的〉能力の存在を村に想定することによって、これらの文は正当化される<sup>43</sup>。

## 5.6 VP 3.7.86

本詩節が問題とするのは、「他の *kāraka* 術語に先行される〈目的〉」が表現される以下の事例である。

[23] *bhuktvā nagaro 'bhiniviśyate* (「彼は食べてから町に入る」)

この文において、町 (*nagara*) には先行規則 A 1.4.45 *ādhāro 'dhikaraṇam* によって〈基体〉(*adhikaraṇa*) という術語が適用される。しかし A 1.4.47 *abhiniviśaś ca* は、*abhi-ni-viś* が表示する〈行為〉に対して基体 (*ādhāra*) である *kāraka* は〈目的〉と呼ばれることを規定する。町は、*abhi-ni-viś* が表示する入る〈行為〉に対して意味のレベルでは基体でありながら、統語論のレベルで *abhi-ni-viś* に相関して〈目的〉と呼ばれるにすぎない。その町は、他の動詞語根が表示する〈行為〉に対しては、意味のレベルで基体であり、〈基体〉と呼ばれる資格を保持する<sup>44</sup>。

本詩節の論点は以下のとおりである。

1. [23] においては、*abhiniviśyate* の *-te* によって町が *abhi-ni-viś* が表示する入る〈行為〉に対する〈目的〉として表示される。*abhiniviśyate* の *-te* によっては、町は〈基体〉としては表示されない。
2. その〈目的〉という術語が適用される町は、*abhi-ni-viś* が表示する入る〈行為〉に対して基体であり、〈基体〉能力を有する。
3. *abhi-ni-viś* 以外の動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に対しては、その本来の〈基体〉能力が考慮される。すなわち、町は、*abhi-ni-viś* が表示する入る〈行為〉に対しては〈目的〉であり、動詞語根 *bhuj* が表示する飲食〈行為〉に対しては〈基体〉である。
4. よって、町を表示する *nagara* の後に第七格接辞が導入されて、\**bhuktvā nagare 'bhiniviśyate* が結果する。なぜなら、〈基体〉は、*abhiniviśyate* の *-te* によっては表示されず、*bhuktvā* の *ktvā* も *bhāva* (〈行為〉) を表示するからである。第七格接辞以外に町を〈基体〉として表示する項目はない。したがってここにおいて擬似既表示 (*anabhihitavat*) の論理は適用できない。
5. しかし、この文は、望ましくない言語形式として受け入れられない。すなわち、「人々は第七格接辞 [の生起] を望まない」(*na tatrechhanti saptamīm*)

<sup>42</sup>A 2.3.12 については本論注 35 を見よ。

<sup>43</sup>*grāmāya gantum icchati* においては、村に欲求〈行為〉に対する〈目的〉能力と進行〈行為〉に対する〈目的〉能力が想定される。A 2.3.2 は当該の村以外のこれらの〈行為〉以外の〈行為〉に対する〈目的〉能力を有する領域に適用機会を有し、A 2.3.12 は当該の村以外の進行〈行為〉に対する〈目的〉能力だけを有する領域に適用機会を有する。今当該の村に関して両規則の適用が同時に結果する。この場合規則の後続性 (A 1.4.2 *vipratīṣedhe param kāryam*) に基づいて A 2.3.12 が優先適用される。よって、村を表示する *grāma* の後には第四格接辞が導入可能となる。*grāmāya gatvā drakṣyati* の場合も同様である。この場合の村には見る〈行為〉に対する〈目的〉能力と進行〈行為〉に対する〈目的〉能力が想定される。A 1.4.2 については小川 [2015:51–53] を見よ。

<sup>44</sup>「他の *kāraka* 術語に先行される〈目的〉」および A 1.4.45 については小川 [2015] を見よ。

6. このことは、町の従属〈行為〉である飲食〈行為〉に対する〈基体〉能力は、同じ町の主要〈行為〉である入る〈行為〉に対する〈目的〉能力に依拠する文法操作—*abhinivīśyate* の *-te* による〈目的〉の既表示に基づく *nagara* の後への第一格接辞導入—と矛盾する文法操作—*nagara* の後への第七格接辞導入—の根拠とはならないことを示す。

## 6

不変化詞 *kṛt* は *bhāva* (〈行為〉) を表示して、*kāra* を表示しない。不変化詞 *kṛt* が使用される文においては、定動詞形の動詞語根が表示する〈行為〉が主要素(被限定者)であり、不変化詞 *kṛt* が後続する動詞語根が表示する〈行為〉は、それに対する従属要素(限定者)である。そして *kāra* (〈能成者〉) を能力とする視点から、不変化詞 *kṛt* が使用される文における名詞接辞導入は次のように説明される。

1. 実体として同一の米粥が〈目的〉として主要〈行為〉である飲食〈行為〉と従属〈行為〉である料理〈行為〉に關与する場合

例：*paktvaudanaḥ bhujyate devadattena*

米粥には、飲食〈行為〉に關する主要〈目的〉能力と料理〈行為〉に關する従属〈目的〉能力がある。主要〈目的〉能力が既表示のとき、従属〈目的〉能力もそれに準じて既表示として扱われる。当該例文においては、*bhujyate* の定動詞接辞 *-te* により、米粥の飲食〈行為〉に關する主要〈目的〉能力は既表示である。

2. 従属〈行為〉である、村を〈目的〉として有する進行〈行為〉が〈目的〉として主要〈行為〉である欲求〈行為〉に關与する場合

例：

*iśyate grāmo gantum devadattena*

村には、欲求〈行為〉に關する〈目的〉能力と進行〈行為〉に關する〈目的〉能力がある。主要〈目的〉能力が既表示のとき、従属〈目的〉能力もそれに準じて既表示として扱われるから、進行〈行為〉に關する〈目的〉能力が既表示として扱われる。*iśyate* の定動詞接辞 *-te* によって、村の欲求〈行為〉に關する〈目的〉能力は既表示である。

3. 同一の町が主要〈行為〉に対しては〈目的〉の地位をもって關与し、従属〈行為〉に対しては〈目的〉の地位を持ち得ず他の *kāra* の地位を有する場合

例：

*bhuktvā nagaro 'bhinivīśyate*

1と2の擬似既表示 (*abhihitavat*) の論理は適用できない。町は主要〈行為〉である入る〈行為〉に対して基体 (*ādharma*) であり、その入る〈行為〉が *abhi-ni-viś* によって表示されるとき統語論のレベルで〈目的〉と呼ばれるにすぎない。町は *bhuktvā* が表示する従属〈行為〉である飲食〈行為〉に対しては本来的に基体のままであり、〈基体〉の資格を有する。このような場合、町には、入る〈行為〉に關する〈目的〉能力と飲食〈行為〉に關する〈基体〉能力があると想定される。町の飲食〈行為〉に關する〈基体〉能力を表示する項目は第七格接辞以外にはない。しかし、飲食〈行為〉は従属〈行為〉であり、この町の従属〈行為〉である飲食〈行為〉に關する〈基体〉能力は、町の主要〈行為〉である入る〈行為〉に關する〈目的〉能力に依拠する第一格接辞導入の文法操作と矛盾する、自己に依拠する第七格接辞導入という文法操作の根拠とはならない。

## VP 3.7.81–注釈和訳研究

\*底本は Iyer [1963] である。句読法は刊本に必ずしも忠実ではない。適切な句読法を提案している。

[VP 3.7.81.0] gatam etat / idam idānīm cintyate / iha karmadvayayoge prādhānyam ārtham āśritya pradhāne lādir uktaḥ / dvitīyā tu prātipadikadvayād<sup>45</sup> apy utpadyata iti tatra guṇapradhānabhūtakriyādvaya- viṣayāyām api karmaśaktāv ekasyā lādinoktatve 'paraśaktyabhidhānāya dvitīyā kasmān notpadyata ity āśaṅkyāha /

以上了。次に以下のことが考察される。

我々の文法体系では、[〈行為〉が] 二つの〈目的〉と結びつく場合、意味上の主要性に依拠して、主要 [〈目的〉] の表示のために *I* 接辞等が起こると言われる。しかし、第二格接辞は、二つの名詞語基のいずれの後にも起こるから、そのようなことが成立する場合、〈目的〉の能力が従属〈行為〉と主要〈行為〉のいずれも対象とする場合に、一方の [〈目的〉能力] が *I* 接辞等によって表示されるとき、他方の [〈目的〉] 能力を表示するために第二格接辞がどうして生起しないことがある<sup>46</sup>。

このような疑念に対して [バルトリハリは次のように] 述べる。

VP 3.7.81: pradhānetarayoḥ yatra dravyasya kriyayoḥ pṛthak / śaktir guṇāśrayā tatra pradhānam anurudhyate //

「[単一の] 〈実体〉に、主要なる (pradhāna) [〈行為〉] とそうでない 〈行為〉に対する異なる能力がある場合、従属要素 (guṇa) を拠り所とする能力は主要素 (pradhāna) に従う」<sup>47</sup>

[VP 3.7.81.1] ihārthānām ekavākyopāttānām samanvayo bhavati / tatra dvayor guṇayor guṇānām ca parārthatvād asaṃbandhaḥ samatvāt mitho 'ṅgāṅgibhāvo nopapadyate, nāpi dvayor guṇayor guṇānām ca parārthatvād asaṃbandhaḥ samatvāt syāt iti / guṇapradhānabhāvena tu samanvayopapattāv ekavākyatā bhavatīty āha—pradhānetarayoḥ yatra iti //81//

我々の見解では、単一文によって言及されている意味の間に結合関係 (samanvaya) がある。その場合、二つの主要素は同等であるから、両者の間に相互的な主従関係 (aṅgāṅgibhāva) は妥当しないし、二つの従属要素間にも [それは妥当] しない。[Mīmāṃsāsūtra に次のように言われている。]

「さらに、従属要素は、[主要素である] 他者を目的とし [その] 他者に奉仕するものであるから、その同等性故に、相互に結びつくことはないであろう」<sup>48</sup>

一方、主従関係での結合が妥当する場合には、単一文性がある。このことを [バルトリハリは] 「[[単一の] 〈実体〉に、] 主要なる 〈行為〉 とそうでない 〈行為〉 に対する [異なる能力がある] 場合」(pradhānetarayoḥ yatra) と述べる。

<sup>45</sup>Iyer: *prātipadikadvayād*. 誤植

<sup>46</sup>この議論の導入部の論点については本論 0 を見よ。

<sup>47</sup>Iyer 1971:198: “When one and the same thing has the power (of being the object) in regard to two actions, the main one and the secondary one, the power in regard to the secondary action follows that in regard to the main one.”

<sup>48</sup>MS 3.1.22: guṇānām ca parārthatvād asaṃbandhaḥ samatvāt syāt //

[VP 3.7.82.0] tatra pradhānanuyāyivād<sup>49</sup> guṇānām pradhānakriyāviṣayakarmaśaktyabhidhāne<sup>50</sup> dravyasya guṇakriyāviṣayāpy abhihitavat prakāśyata iti pradhānānurodhaṃ sāmānyenoktaṃ vyākhyātum āha /

従属要素は主要素に従うものであるから、実体の主要〈行為〉を対象とする〈目的〉能力が表示される時、その実体の従属〈行為〉を対象とする〔〈目的〉能力〕もまた表示されているかのように顕現せしめられるというように、その〔第81詩節に〕おいて一般的に述べた〔従属〈行為〉を対象とする〈目的〉能力の〕主要素への随順（anurodha）を説明するために〔バルトリハリは以下の詩節を〕述べる。

VP3.7.82: pradhānaviṣayā śaktiḥ pratyayenābhidhīyate /  
yadā guṇe tadā tadvad anuktāpi prakāśate //

「主要〔〈行為〉〕を対象とする能力が接辞によって表示される時、従属〔〈行為〉〕に対する〔能力〕が、実際には表示されていないにもかかわらず、あたかもそれであるかのように〔すなわち、表示されているかのように〕顕現する」<sup>51</sup>

[VP 3.7.82.1] pradhānakriyāvācino dhātor utpannena pratyayena lādinā yadā pradhānakriyāviṣayā karmaśaktiḥ pratyāyate tadā guṇakriyāviṣayāpi sāksād anuktāpi tadvat prakāśate itīyam anuvṛttir vyākhyātā //82//

主要〈行為〉を表示する動詞語根の後に起こる *l* 接辞等の接辞によって、主要〈行為〉を対象とする〈目的〉能力が理解せしめられる時、従属〈行為〉を対象とする〔〈目的〉能力〕も、たとえ直接的には表示されなくても、それであるかのように〔すなわち、表示されているかのように〕顕現する。以上このように〔従属〈行為〉を対象とする〈目的〉能力の主要素への〕随順（anuvṛtti）が説明された。

[VP 3.7.83.0] atrodāharaṇam āha /

〔バルトリハリは〕このことに対する例を挙げる。

VP3.7.83: pacāv anuktaṃ yat karma ktvānte bhāvābhidhāyini /  
bhujau śaktyantare 'py ukte tat taddharmaḥ<sup>52</sup> prakāśate //

「bhāva（〈行為〉）を表示する *ktvā* で終わる項目〔*paktvā*（「料理してから、煮てから」）〕がある時、料理〈行為〉（*paci*）に対する〈目的〉は〔接辞 *ktvā* によって〕表示されないから、それゆえ、飲食〈行為〉（*bhujī*）に対する〔〈目的〉能力〕—たとえそれは料理〈行為〉に対する〈目的〉能力とは異なるとしても—が表示される時、その〔料理〈行為〉に対する〈目的〉能力の、〕〔飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力がもつすでに表示されているという属性に類似した〕属性が顕現する」<sup>53</sup>

<sup>49</sup>Iyer: *pradhānānumāyivād*. 誤植である。

<sup>50</sup>Raghuṇātha に従う。Iyer: *guṇānām apradhānakriyāviṣayakarmaśaktyabhidhāne*.

<sup>51</sup>Iyer 1971:198: "Where the power (of being the object) relating to the main action is expressed by the verbal suffix, then the one relating to the secondary action, though not expressed, is understood."

<sup>52</sup>Rau: *taddharma*. ヘーラーラージャが当該箇所を *taddharmaḥ* と読んでいることは、彼の注釈より明らかである。VP 3.7.83.10 を見よ。

<sup>53</sup>Iyer 1971:198: "Where the root 'to cook' (*pac*) takes the suffix *ktvā* in the sense of pure action, the power of being object in regard to it which is not expressed is in the same position as the other one in regard to the root 'to eat' (*bhuj*) which is actually expressed."

Rau の読みに従えば以下のように解釈される。「bhāva（〈行為〉）を表示する *ktvā* で終わる項目〔*paktvā*

[VP 3.7.83.1] paktvaudano bhujyate ity udāharaṇam /

*paktvaudano bhujyate* (「[彼によって] 米粥が煮られてから食べられる」) が例文である。

[VP 3.7.83.2] atra ktvāpratyayasya tumarthagrahaṇānuvṛtṭyā bhāṣyakāramatena bhāve vidhānam /

この事例においては、接辞 *ktvā* は、[規則 A 3.4.9 tumarthe sesenase’asenksekasenadhyaiadhyain-kadhyaikadhyaisādhyaisādhyaintavaitaventavenaḥ から規則 A 3.4.21 samānakartṛkayoḥ pūrvakāle に] *tumārtha* という語が継起することに基づき、Bhāṣya の作者の見解では、bhāva (〈行為〉) を表示するために導入される<sup>54</sup>。

[VP 3.7.83.3] vārttikakāro hi ā ca tumunaḥ samānādhikaraṇe iti papāṭha / yathāvakāśaṃ śakadhr̥ṣa ityādisūtravidhīyamānād ā tumunpratyayād anuprayogadhātunā samānābhidheyā ṇamulādayaḥ pratyayā vaktavyā iti vārttikārthaḥ /

実に、Vārttika の作者は以下のような言明をなした。

「A 3.4.65 śakadhr̥ṣajñāglāghaṭarabhalabhakramasahārḥāstyartheṣu tumun までの規則で導入が規定されている接辞は、追使用 (anuprayoga) される項目と指示対象を同じくする場合に導入される、という規定が定式化されるべきである」(vt. 3 on A 3.4.26: ā ca tumunaḥ samānādhikaraṇe //)

適用機会に応じて A 3.4.65 等の規則において導入が規定されている *tumun* 接辞までの、*ṇamul* を初めとする接辞は、追使用される動詞語根 [に後続する定動詞接辞] と同一の表示対象 (samānābhidheya) を有すると言われるべきである。これが当該 vārttika の意味するところである。

[VP 3.7.83.4] tena svādumkāraṃ bhujyate yavāgūr devadattena iti ṇamulā karmābhidhānād yavāgūsabdād dvitīyā na bhavati / devadattaśabdāc ca tṛtīyā bhavati / anyathā kṛtvāt kartari ṇamulutpattau devadattaśabdāt tṛtīyā na syāt /

それゆえ、*svādumkāraṃ bhujyate yavāgūr devadattena* (「粥 (yavāgū) がデーヴァダッタによって甘くされて食べられる」) においては、[*svādumkāraṃ* (「甘くして、甘くされて」) における] 接辞 *ṇamul* によって〈目的〉がすでに表示されているから、*yavāgū* (「粥」) という語の後に第二格接辞は起こらない。そして、*devadatta* という語の後には第三格接辞が起こる。さもなくば、[*ṇamul* は、] *kṛt* 接辞であるから、[A 3.4.67 kartari kṛt により] 〈行為主体〉を表示するために接辞 *ṇamul* が生起すれば、*devadatta* という語の後には第三格接辞は起こらないであろう<sup>55</sup>。

(「料理してから、煮てから」) があるとき、料理〈行為〉(paci) に対する〈目的〉は [接辞 *ktvā* によって] 表示されない。その〈目的〉は、飲食〈行為〉(bhujī) に対する [〈目的〉能力] —たとえそれは料理〈行為〉に対する〈目的〉能力とは異なるとしても—が表示されるとき、その [飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力] がもつすでに表示されているという] 属性に類似した属性をもつものとして顕現する」

<sup>54</sup>本論 4 を見よ。

<sup>55</sup>本論 3.1–2 を見よ。

[VP 3.7.83.5] anenaiva nyāyena paktvaudano bhujyate ity atrāpi ktvāpratyayo bhujyate ity anuprayogadhātunā samānābhidheye karmaṇy evotpadyata iti nāsti kasyāścid api śakter anabhidhānam iti vārttikakāramatenedam ucyate /

これと同じ道理によって、*pektvaudano bhujyate* というこの文においても、接辞 *ktvā* は、*bhujyate* という追使用動詞語根 [に後続する接辞の表示対象] と同一の表示対象であるまさに〈目的〉を表示するために生起するから、どのような能力も表示されない [すなわちどのような *kāraka* も表示されない] ということはない。このようなことが、Vārttika の作者の見解に従って主張される。

[VP 3.7.83.6] bhāṣyakāras tu paktvaudanaṃ gamyate grāmaḥ ity atrānena nyāyena dvitīyā na syād iti vārtikaṃ [vārttikaṃ] pratyācaṣṭe /

一方、Bhāṣya の作者は以下の理由から当該 vārttika を否定する。

*pektvaudanaṃ gamyate grāmaḥ* (「彼は米粥を煮てから村に行く」) というこの文においては、[Vārttika の作者が提示する] この道理によって [*odana* (「米粥」) の後に] 第二格接辞は起こらないことになろう<sup>56</sup>。

[VP 3.7.83.7] tumarthagrahaṇānuvṛtṭyā ṇamulādīnāṃ bhāve vidhānaṃ manyate /

彼 [Bhāṣya の作者] は、[A 3.4.9 における] *tumārtha* という語の継起によって、*ṇamul* 等は *bhāva* (〈行為〉) を表示するために導入されると考える。

[VP 3.7.83.8] tumārtho hi bhāvaḥ / kṛtvāt kartari siddhe sektvāprabhṛtīnāṃ tumārtha iti vacanāt kartur apakarṣaḥ / na cānyas tumuno 'rtho nirdiṣṭa ity anirdiṣṭārthāḥ pratyayāḥ svārthe bhavāntīti svasyāḥ prakṛter artho bhāvaḥ siddhaḥ /

実に接辞 *tum(un)* の意味は *bhāva* (〈行為〉) である。kṛt 接辞であるが故に、[A 3.4.67 *kartari kṛt* によりその意味として] 〈行為主体〉が確立されるとき、接辞 *se* や *ktvā* 等は接辞 *tum(un)* の意味を有すると言われるから、〈行為主体〉は除外される。そして、[〈行為主体〉以外の] 別の意味は *tumun* の意味として特定されていないから、「その意味の特定されていない接辞は、自己が添加される基体の意味を表示する」という [解釈規則により<sup>57</sup>、*tumun* は] 自己の基体 [である動詞語根] の意味としての *bhāva* (〈行為〉) を意味として有することが確立される<sup>58</sup>。

[VP 3.7.83.9] evaṃ ktvānte paktvā ity asmin bhāvavācīni pacikriyāviṣayaudanasya karmaśaktir anuktā /

このように、接辞 *ktvā* で終わる *pektvā* というこの語が *bhāva* (〈行為〉) を表示するとき、[接辞 *ktvā* によって] 料理 〈行為〉 を対象とする米粥の 〈目的〉 能力は表示されない。

[VP 3.7.83.10] bhujikriyāviṣayāyāṃ karmaśaktāu lenābhīhitāyāṃ tathaiiva taddharmaḥ tasya pradhānasyeva<sup>59</sup> dharmāḥ pratyāyitatvalakṣaṇo yasya taddharmaḥ prakāśate iti dvitīyā na bhavaty odanāt /

飲食 〈行為〉 を対象とする 〈目的〉 能力が *l* 接辞によってすでに表示されているとき、その [飲食 〈行為〉 を対象とする 〈目的〉 能力の属性が顕現するのと] とまったく同じように、その属性

<sup>56</sup>本論 3.6 を見よ。

<sup>57</sup>本論 4 を見よ。

<sup>58</sup>本論 4 を見よ。

<sup>59</sup>Iyer: *pradhānasyaiva*. ヘーラーラージャの *taddharmaṇoḥ* (VP 3.3.6a) の解釈 (Prakāśa on VP 3.3.6: *tasya sambandhasyeva dharmāḥ pāraṇtryalakṣaṇo yayos tau taddharmāṇau*) に準じ、*pradhānasyeva* に訂正されるべきである。iva (「x のような」) ではなく *eva* (「まさに」) の読みを採用すれば、「まさに主要素である飲食 〈行為〉 に対する 〈目的〉 能力がもつ既表示属性を有するもの」という意味となり、従属要素である料理 〈行為〉 に対する 〈目的〉 能力が真正既表示属性を有することになってしまう。この場合、従属要素である料理 〈行為〉 に対する 〈目的〉 能力はすでに表示されているかのように顕現すると言うことはできない。

(taddharma)、すなわち、その主要素 [である飲食〈行為〉を対象とする〈目的〉能力] がもつすでに理解せしめられているという属性 (pratyāyitvalakṣaṇaḥ dharmah)、そのような属性に類似した属性を有するもの [すなわち従属要素である料理〈行為〉を対象とする〈目的〉能力] の [すでに理解せしめられているという属性に類似した] 属性が顕現する。したがって、*odana* の後に第二格接辞は起こらない<sup>60</sup>。

[VP 3.7.83.11] paktvaudanaṃ bhunkte ity atra pacikriyāpekṣād eva devadattāt kartus tr̥tīyāpy asmān nyāyān na bhavati /

*pektvaudanaṃ bhunkte* [*devadattaḥ*] (「[デーヴァダッタは] 米粥を煮てから食べる」) というこの文においては、まさに料理〈行為〉を期待する〈行為主体〉を表示する *devadatta* の後に、第三格接辞もまたこの道理から起こらない<sup>61</sup>。

[VP 3.7.83.12] pakvaudanaṃ [pektvaudanaṃ] gamyate grāma ity atra tu gamipratyayenaudanagatā karmaśaktir nābhihiteḥ bhavati dvitīyā /

一方、*pektvaudanaṃ gamyate grāmaḥ* というこの文においては、動詞語根 *gam* に後続する接辞によって、米粥にある〈目的〉能力は表示されないから、[*odana* の後に] 第二格接辞が起こる。

[VP 3.7.83.13] yady api ca sādhanāikārthasamavetāyāṃ saṅkhyāyāṃ bhujyate ity vibhaktir utpadyate tathāpi paciviśayakarmopādhisāṅkhyānabhidhānād bhaved dvitīyete nyāyo 'yam udghoṣyate / ekatvādiṣv api hi vibhaktyartheṣv avaśyaṃ karmādayo 'ngatvenāpekṣaṇīyāḥ //83//

そして、[*pektvaudano bhujyate* においては、飲食〈行為〉に対する〈目的〉能力としての] 〈能成者〉 [が内属する対象] と同じ対象 [である米粥] に内属する [単数性という] 数 (*saṅkhyā*) を表示するために、*bhujyate* において [-*te* という] *vibhakti* (定動詞接辞) が生起するとしても、料理〈行為〉を対象とする〈目的〉の限定的添性である数は [その *vibhakti* によって] 表示されないから、[*odana* の後に] 第二格接辞が起こるであろう、というこの道理が声高に公言される。実に、単数性等は *vibhakti* (定動詞接辞・名詞接辞) の意味であるとしても、必ず、〈目的〉等が [*vibhakti* (定動詞接辞・名詞接辞) 生起の] 要因として期待されるべきである<sup>62</sup>。

[VP 3.7.84.0] udāharaṇāntaram āha /

別の例を述べる。

VP 3.7.84: iṣe ca gamisaṃsparśād grāme yo lo vidhīyate /  
tatteṣṇaiva nirbhogaḥ kriyate gamikarmaṇaḥ //

「さらに、[*iṣyate grāmo gantum* (「村が行こうと欲される」) においては、] 欲求〈行為〉は、進行〈行為〉との関係を通じて村を対象とするから、[欲求〈行為〉を表示する動詞語根 *iṣ* の

<sup>60</sup>VP 3.7.83.10 において、*taddharmaḥ tasya pradhānasyeva dharmah pratyāyitvalakṣaṇo yasya taddharmaḥ* と述べられている。この注釈から明らかになることは以下のとおりである。(1) 複合語 *taddharma* は *tad* と *dharmā* の *tatpuruṣa* である。(2) 複合語 *taddharma* の *tad* は、その主要素 [すなわち主要〈目的〉能力] のもつ属性—既に理解せしめられているという属性—を特徴とする属性—に類似した (*iva*) 属性を有するもの、すなわち従属的〈目的〉能力を指示する。(3) そのような従属的〈目的〉能力の属性 (*taddharma*) とは、擬似既表示属性である。本論 5.3 を見よ。

<sup>61</sup>*bhunkte* の *-te* は主要〈行為〉である飲食〈行為〉に対する〈行為主体〉能力を表示する。*pektvā* が表示する従属〈行為〉である料理〈行為〉に対する〈行為主体〉能力はすでに表示されているかのように顕現する。

<sup>62</sup>数接辞選択規則 A 1.4.21 *bahuṣu bahuvacanam*、A 1.4.22 *dvyekayor dvivacanaikavacane* は定動詞接辞 (A 1.4.102 *tany ekavacanadvivacanabahuvacanāny ekaśaḥ*)、名詞接辞 (A 1.4.103 *supaḥ*) に共通である。*vibhakti* については本論注 3 を見よ。

後に導入される] 接辞 [で終わる項目] においては、同じ動詞語根 *iṣ* [が表示する欲求〈行為〉] による進行〈行為〉の〈目的〉[である村]の享受(対象化)が実現される」<sup>63</sup>

[VP 3.7.84.1] *iṣyate grāmo gantum ity udāharaṇam / atreṣer ubhe karmaṇī, gamer grāma eveti grāmasyeṣi-  
viṣayāyāṃ karmaśaktāv abhihitāyāṃ gamiviṣayāpi*<sup>64</sup> *tadvat prakāśate /*

*iṣyate grāmo gantum* (「村が行こうと欲される」) が例である。この文においては、動詞語根 *iṣ* [が表示する欲求〈行為〉] には〈目的〉が二つある。動詞語根 *gam* [が表示する進行〈行為〉] の〈目的〉は村だけである。したがって、村のもつ、欲求〈行為〉を対象とする〈目的〉能力がすでに表示されているときには、[同じ村の] 進行〈行為〉を対象とする [〈目的〉能力] もまたそれと同様に [すでに表示されているかのように] 顕現する。

[VP 3.7.84.2] *tatra gamanārtham eṣaṇam / tathā ca kriyāyāṃ kriyārthāyāṃ upapade tumunn iti phal-  
abhūtātra gamikriyāpradhānaṃ neṣir iti śaṅkāyāṃ udāharaṇāntaram idam /*

その文においては、欲求行為は進行行為を目的としている。そしてそのような場合、[A 3.3.10 により] 〈行為1〉を目的とする〈行為2〉を表示する項目が共起項目であるとき、[〈行為1〉を表示する動詞語根の後に] 接辞 *tumun* が起こるから、この場合、主要素は、結果である進行〈行為〉であり、欲求〈行為〉ではない<sup>65</sup>。このような懸念があるから、この別の例が述べられている。

[VP 3.7.84.3] *ākhyātapadavācye hy arthe nirvartyatvāt pradhānatā vartate / paktvā bhujyata ity atra tv  
ārtham api prādhānyam asti / pākasya bhojanārthatvāt /*

実に、定動詞形 (*ākhyātapada*) によって表示されるべき意味は、実現されるべきものであるから、それには主要性がある。一方、*paktvā bhujyate* (「料理してから食べられる」) というこの文においては、ものの在り方としても (*ārtha*)<sup>66</sup>、[定動詞形 *bhujyate* によって表示されるべき意味には] 主要性がある。なぜなら、料理行為は飲食を目的とするからである。

[VP 3.7.84.4] *gamisaṃsparśād iti / iṣer dravyāntarasambandhaḥ kriyāntaramukhenaiva sarvadā bhavati /  
tad iha [na]*<sup>67</sup> *darśanādīmukhena grāme icchā, api tv ekavākyopāttagamidvāreṇety arthaḥ /*

*gamisaṃsparśāt* (「進行〈行為〉との関係を通じて」) に関して：欲求〈行為〉の [自己とは] 異なる実体との関係は、まさに [自己とは] 異なる〈行為〉を通じて常に起こる。それゆえ、この事例においては、村に対する欲求は、[*grāmam icchati* (「彼は村を欲する」) などの場合のように] 知覚行為等を通じてではなく、単一文において言及された進行〈行為〉を通じて起こる。このような意味である。

[VP 3.7.84.5] *nirbhogaḥ carvaṇam / ākhyānam iti yāvat /*

「享受」(*nirbhoga*) とは味わうこと (*carvaṇa*) であり、要するに伝達 (*ākhyāna*) である。

<sup>63</sup>Iyer 1971:189: “(In the sentence *iṣyate grāmo gantum* = the village is desired to be reached), because of the connection of the verb *iṣyate* with *gantum*, the verbal suffix which is prescribed to express the power of the village to be the object of *iṣ* also expresses its power to be the object of *gam*.”

<sup>64</sup>Iyer: *grāmaviṣayāpi*. Raghunātha の提案に従う。

<sup>65</sup>本論 5.4 を見よ。勿論、接辞 *tumun* は〈行為主体〉能力も〈目的〉能力も表示しない。

<sup>66</sup>この文脈での *ārtha* は言葉から理解される意味 (*sabdārtha*) ではなく、事実としてのものの在り方 (*vastvārtha*) を意図している。本論注 40 を見よ。

<sup>67</sup>Raghunātha は否定辞挿入を提案している。



[VP 3.7.84.6] *iṣṇaiva iti / iṣipratyayena lakāreṇa karmaṇi vihitena / tantreṇa hi śaktidvayam apy abhidadhāti pratyaya iti vākyapadīye nirṇītam //84//*

*iṣṇaiva* (「同じ動詞語根 *iṣ*」): 動詞語根 *iṣ* に後続する接辞である、〈目的〉表示のために導入される *I* 接辞によって、ということである<sup>68</sup>。

実に、[これによって動詞語根 *iṣ* に後続する] 接辞は、同時に (*tantreṇa*)、[村に存する〈目的〉能力と進行〈行為〉に存する〈目的〉能力という] 二つの能力のいずれをも表示するということが *Vākyapadīya* において確定される。

[VP 3.7.85.0] *matāntareṇāpy atropapattim āha /*

別の見解によっても、これに関する合理化を述べる。

VP 3.7.85: *paktvā bhujyate ity atra keṣāṃcin na vyapekṣate / odanaṃ pacatiḥ so 'sāv anumānāt pratīyate //*

「ある者達の見解では、*paktvā [odanaḥ] bhujyate* (「[米粥が] 煮られてから食べられる」) というこの文においては、料理〈行為〉は米粥を期待しない。その[飲食〈行為〉の〈目的〉である米粥]が推理からこれとして[すなわち、料理〈行為〉の〈目的〉として]理解される」<sup>69</sup>

[VP 3.7.85.1] *keṣāṃcin mate 'tra vākye pacikriyaudanaṃ nāpekṣate / prathamāntasyaudanasya paktveti sambandhābhāvāt / bhujyate ity anenaiva sambandho bhavaty odanasyety ekaiva karmaśaktiḥ, sā cābhihiteti kvedam upatiṣṭhate pradhānaśaktyabhidhāne guṇakriyāśaktir abhihitavat prakāśata iti /*

ある者達の見解では、[*paktvaudano bhujyate* という] この文では、料理〈行為〉は、米粥を期待しない。第一格接辞で終わる *odana* (「米粥」) は、*paktvā* (「煮てから」) というこの項目と関係しないから。[第一格接辞で終わる] *odana* は、*bhujyate* (「食べられる」) というこの項目とのみ関係する。したがって、[米粥にある]〈目的〉能力はまさに単一であり、そしてそれはまさに [*bhujyate* の *-te* によって] すでに表示されているから、どこにおいて、「主要素に対する能力が表示されるとき、従属〈行為〉に対する能力があたかも表示されているかのように (*abhihitavat*) 顕現する」ということが思い起こされよう。

[VP 3.7.85.2] *yadi tarhi pacinaudanasyaśambandhaḥ paktvānyat kiṃcid odano bhujyate ity arthaḥ syāt / tathā ca vivakṣitam odanapākasya bhujyaṅgatvaṃ na pratīyetye āśaṅkyāha so 'sāv anumānāt pratīyate iti /*

[反論] その場合、もし、動詞語根 *pac* [が表示する料理〈行為〉] と米粥が関係しないとするならば、何か別のものを料理して米粥が食べられるという意味となろう。そしてそのような場合、意図されている、米粥の料理は [米粥に対する] 飲食〈行為〉の要因であるということは理解されないであろう。

[答論] このような懸念に対して、「その [飲食〈行為〉の〈目的〉である米粥] が推理からこれとして [すなわち、料理〈行為〉の〈目的〉として] 理解される」(*so 'sāv anumānāt pratīyate*) と [バルトリハリは] 述べる。

<sup>68</sup>ヘーラーラーの *iṣṇaiva* のこの解釈は、彼が当該詩節 d 句を *tenesiṣṇaiva nirbhogaḥ* と読んでいたことを示唆する。

<sup>69</sup>Iyer 1971:199: “In the sentence ‘(sic) after cooking, it (the rice) is eaten (*paktvaudano bhujyate*), according to some, the root ‘to cook’ does not require rice as its object. That (rice is the object) is understood by inference.”

[VP 3.7.85.3] sa iti parāmr̥ṣṭasyaudanasya buddhyā sākṣātkṛtasyāsāv iti pratyakṣānukāreṇa pratīnirdeśaḥ /

*saḥ*（「その」）というように反省的に捉えられている〔飲食〈行為〉の〈目的〉である〕米粥が、心によって直証されているものとして、*asau*（「これとして」）というように直接知覚に準じて再指示されている。

[VP 3.7.85.4] sākṣātpacisamanvayāyogyo 'py odanaḥ sāmāthyāt pacer apekṣānīyatvena pratīyate /

米粥は直接的には料理〈行為〉と結合し得ないとしても、言明効力（*sāmāthya*）から、料理〈行為〉によって期待されるべきものとして理解される。

[VP 3.7.85.5] kiṃ sāmāthyam iti cet ekavākyatvam iti brūmaḥ / śrutasaṃbandho hy aśrutasaṃbandha-parikalpanāl laghuḥ /

[問] 言明効力とは何か。

[答] 単一文性（*ekavākyatva*）であると我々は答えよう。実に、直接明言されているものとの関係は、直接明言されていないものとの関係の想定より、簡便である。

[VP 3.7.85.6] etac ca saty eva guṇapradhānabhāve nānyatheti pūrvokta eva nyāyo 'trāśrayaṇīyaḥ, iti pūrvoktam eva darśanaṃ nyāyāyā / ata evārucyānyamatatvenopanyāsaḥ kila /

そしてこの〔単一文性〕は、主従関係がある場合にのみ成立し、他の場合には成立しないから、まさに先に述べた道理がこの事例に関して認められるべきである。したがって、まさに先に述べた見解が理に適っている。まさにこの故に、意に沿わない他者の見解として〔VP 3.7.85 は〕提示されていると、伝聞されている。

[VP 3.7.85.6] bhujīḥ pākam apekṣata iti sannihitenaivākāṅkṣā pūrayitavyā pākasya bhujyapekṣayā pūrva-kālasyeti guṇapradhānabhāvopapattāv ekavākyatopapattiḥ //85//

飲食〈行為〉は料理行為を期待するから、料理行為が飲食〈行為〉に相関して先行時にあるとき、その〔〈目的〉に対する〕期待は、まさに近接しているものによって満たされるべきである。したがって、〔米粥を〈目的〉とする料理〈行為〉と米粥を〈目的〉とする飲食〈行為〉との間に〕まさに主従関係が妥当する場合には、単一文性が妥当する。

[VP 3.7.86.0] na kevalaṃ karmākhyakāra-kaviṣayo 'yaṃ nyāyaḥ, yāvat kārakāntare 'pīti vyāptyartham udāharaṇāntaram āha /

この〔従属〈行為〉に相関する能力は主要〈行為〉に相関する能力に従うという〕道理は、〈目的〉と呼ばれる *kāra* を対象とするだけではない。他の *kāra* に関しても妥当する。この普遍性を示すために、別の例を述べる。

VP 3.7.86: tathābhīniviśau<sup>70</sup> karma yat tīnante 'bhīdhīyate /  
ktvānte 'dhīkaraṇatve 'pi na tatrecchanti saptamīm //

「さらに、定動詞接辞で終わる項目において表示される、入る〈行為〉に対する〈目的〉に関しては、たとえそれは *ktvā* で終わる項目〔が表示する〈行為〉〕に対しては〈基体〉であるとしても、人々は第七格接辞〔の生起〕を望まない」<sup>71</sup>

<sup>70</sup>Iyer: *tatrābhīniviśau*.

<sup>71</sup>Iyer 1971:200: "(In the sentence: '(sic) after eating, the city is entered = *bhuktvā nagaro 'bhīniviśyate*) that which is the object of the verb *abhīniviś* and is expressed by the verbal suffix is the substratum of the action denoted by the word ending in *ktvā* and yet the use of the locative case-ending to express it is not wanted."

[VP 3.7.86.1] bhuktvā nagaro 'bhiniviśyate ity atrābhiniviśaś ceti nagarasyābhiniviśer ādhārasya karma-samjñāyām tiñante 'bhiniviśyata ity atra pradhānabhūte viśaye 'bhīhitā karmaśaktiḥ /

*bhuktvā nagaro 'bhiniviśyate* (「彼は食べてから町に入る」) というこの文においては、A 1.4.47 *abhiniviśaś ca* により入る〈行為〉の基体 (ādhāra) である町が〈目的〉と呼ばれる。この場合、定動詞接辞で終わる *abhiniviśyate* というこの項目において、主要素である [入る〈行為〉という] 対象に対する〈目的〉能力が [定動詞接辞-*te* によって] すでに表示されている<sup>72</sup>。

[VP 3.7.86.2] bhuktveti ktvāntaviśaye 'dhikaraṇaśaktir api guṇatvāt svakāryam saptamīvibhakti-lakṣaṇam na prayuñkte /

*bhuktvā* (「食べてから」) という接辞 *ktvā* で終わる項目 [が表示する飲食〈行為〉] という対象に対しては、[その町のもつ能力は]〈基体〉能力であるとしても、[飲食〈行為〉は入る〈行為〉に対して] 従属要素であるから、第七格接辞の導入と特徴付けられる自己の文法操作を引き起こさない<sup>73</sup>。

[VP 3.7.86.3] saptamī hy atra pradhānakriyāviśayā karmaśaktir na pratīyete ti pradhānoparodho guṇena kṛtaḥ syāt /

実に、この [ように第七格接辞が名詞語基 *nagara* の後に生起して、\**bhuktvā nagare 'bhiniviśyate* となった] 場合、第七格接辞によって、[入る〈行為〉という] 主要〈行為〉を対象とする [村の]〈目的〉能力は理解されないであろう。したがって、従属要素による主要素の抑圧がなされることになる。

[VP 3.7.86.4] na caiśa nyāyāḥ / pradhānanūyāyitvād guṇānām pradhānavirodhini svakārye udāsata eva /

しかし、このことは理に合わない。従属要素は主要素に従うものであるから、それら [従属要素] は主要素と矛盾する自己の文法操作に関してまさに無関心である。

[VP 3.7.86.5] prādhānyam ca sarvatra tiñantārthasya śābdavyavahāra-viśrāntiśthānasya vākya-rthabhūtasya /

そして、主要性は、いかなる場合も、言葉に基づく活動の休らう場である、文意 (*vākya-rtha*) である、定動詞接辞で終わる項目の意味 (*tiñantārtha*) にある。

[VP 3.7.86.6] anenaiva nyāyena nagare 'bhiniviśya bhūñkte ity atra bhujyāśrayeṇādhikaraṇatvena<sup>74</sup> nagarasyābhiniviśikarmatvam apodyate //86//

まさにこの道理により、*nagare 'bhiniviśya bhūñkte* (「彼は、町で、入ってから食べる」) というこの文においては、[主要〈行為〉である] 飲食〈行為〉に依拠すれば、町は〈基体〉であるから、町が [従属〈行為〉である] 入る〈行為〉の〈目的〉であることは否定される<sup>75</sup>。

<sup>72</sup>A 1.4.47 は *upasarga* 複合体 *abhi-ni* に先行された *viś* (「入る」) が表示する〈行為〉の基体 (ādhāra) である *kāraka* は〈目的〉と呼ばれることを規定する。本論 5.6 を見よ。

<sup>73</sup>この場合の第七格接辞導入は A 2.3.26 *saptamī adhikaraṇe ca* (「〈基体〉が表示されるべきとき、もしその〈基体〉が他の項目によって表示されていないならば、第七格接辞が起る」) による。

<sup>74</sup>Iyer: *bhujyāśrayeṇādhikaraṇatvena*. 誤植

<sup>75</sup>定動詞形 *bhūñkte* が表示する飲食〈行為〉に対して *nagara* が表示する町は〈基体〉である。一方、この町は、*ktvā* (→ *Iyap*) で終わる項目である *abhiniviśya* が表示する入る〈行為〉に対しては〈目的〉である。入る〈行為〉に対して定動詞形が表示する飲食〈行為〉は主要素である。町はこの主要素である飲食〈行為〉に相関して〈基体〉であることを維持する。よって A 2.3.26 の適用によって町を表示する *nagara* の後に第七格接辞が導入される。

## 参考文献・略号

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Cardona 1997: Appendix.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali, edited by F. Kielhorn, third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar.* 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.

1962 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa edited critically with the commentary Tattvādarśa of MM. K. V. Abhyankar.* Part I. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Abhyankar, Kashinath Vasudev, and Ganesh Ambadas Joshi

1976 *Śrījaiminipraṇītaṃ Mīmāṃsādarśanam . . . .* Ānandāśrama Sanskrit Series 97. Pune: Ānandāśrama.

Cardona, George

1997 *Pāṇini, His Work and Its Traditions. Volume I: Background and Introduction.* 2nd ed. Delhi: Motilal Banarsidass.

KV: *Kāśikāvṛtti*: Vāmana and Jayāditya's *Kāśikāvṛtti*. See Miśra 1985.

MBh: Patañjali's *Vyākaraṇamahābhāṣya*. See (1) Vedavrata 1962–63 and (2) Abhyankar 1962–72. [References of the text of the *Mahābhāṣya* are to volumes, pages, and lines of Abhyankar 1962–72.]

MS: *Mīmāṃsāsūtra*. See Abhyankar and Joshi.

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jineन्द्रabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra.* 6 vols. Ratnabharati Series 5–10. Varanasi: Ratna Publications.

Ogawa, Hideyo (小川 英世)

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古希記念論文集』（九州大学出版会）533–584

2014 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhanasamuddeśa）の研究—VP3.7.70–79: A 1.4.51 akathitaṃ ca（2）」『比較論理学研究』11: 19–61.

2015 「Vākyapadīya「〈能成者〉詳解」（Sādhanasamuddeśa）の研究—VP3.7.80」『比較論理学研究』12: 39–68.

Padamañjarī: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra 1985.

PIŚ: Nāgeśa's *Paribhāṣenduśekhara*. See Abhyankar 1962.

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata 1962–63. [References of the text of the *Pradīpa* are to volumes and pages of Vedavrata 1962–63.]

Prakāśa: Helārāja's *Prakāśa*. See Subramania Iyer 1963, 1973.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1979 *Vākyapadīyam, Part III, vol. 2 (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Sādhana, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṅkhyā, Upagraha and Liṅga Samuddeśa) with the Commentary Prakāśa by Helārāja and Ambākarīrī by Pt. Raghunātha Śarmā.* Sarasvatī Bhavana Grantha-mālā, 91. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Rau, Wilhelm

1977 *Bhartr̥haris Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen.* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Subramania Iyer, K. A.

1963 *Vākyapadīya of Bhartr̥hari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part 1.* Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.

1971 *The Vākyapadīya of Bhartr̥hari, chapter III, part 1; English translation.* Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series, 71. Poona: Deccan College.

Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Vedavrata 1962–63.

Vedavrata

1962–63 *Śrībhagavatpatañjaliviracitaṃ Vyākaraṇamahābhāṣyam (Śrīkaiyaṭakṛtapradīpena nāgojībhaṭṭakṛtena bhāṣyapradīpoddotyotena ca vibhūṣitam).* 5 vols. Gurukul Jhajjar (Rohatak): Hairyāṇā-Sāhitya-Saṃsthānam.

VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau, Subramania Iyer. [References to kārikās of the *Vākyapadīya* are made according to Rau 1977, so that kārikā numbers are given according to his edition.]

(おがわ ひでよ、広島大学 [インド哲学])

A Study of the Sādhanasamuddeśa of the *Vākyapadīya*: VP 3.7.81–86

Hideyo Ogawa

In VP 3.7.81–86 Bharṭṛhari deals with the following sentences:

- [1] *paktvaudano bhujyate devadattena*  
‘After cooking, Devadatta eats rice gruel’ (lit. ‘After being cooked, rice gruel is eaten by Devadatta’).
- [2] *iṣyate grāmo gantum devadattena*  
‘The village is wished to be reached by Devadatta’.
- [3] *bhuktvā nagaro ’bhiniviśyate devadattena*  
‘After eating, Devadatta enters the city’ (lit. ‘After eating, the city is entered by Devadatta’).

In [1] and [3] the absolutives *paktvā* ‘having cooked’ and *bhuktvā* ‘having eaten’, which end in the kṛt affix *ktvā* (A 3.4.21 *samānakartṛkayoḥ pūrvakāle*), are respectively used; in [2] the infinitive *gantum* ‘to reach’, which ends in the kṛt affix *tumun* (A 3.3.158 *samānakartṛkeṣu tumun*), is used. The finite verbs (*ākhyāta*) *bhujyate* ([1] *bhuj* ‘to eat’), *iṣyate* ([2] *iṣ* ‘to wish’), and *abhiniviśyate* ([3] *abhi-ni-viś* ‘to enter’) are passive.

In the given sentences the act denoted by the verb to which the kṛt affix is added and the act denoted by the verb which is followed by the verb ending have the same agent Devadatta (*samānakartṛka*). In [1] the rice gruel denoted by the nominal *odana-* serves as object (*karman*) with respect to the act denoted by the verb *pac* ‘to cook’ as well as that by the verb *bhuj* and in [2] the village denoted by the nominal *grāma-* serves as object with respect to the act denoted by the verb *gam* ‘to reach’ as well as that by the verb *iṣ*. In [3] the city denoted by the nominal *nagara-* serves as locus (*ādhāra*) with respect to the act of entering and is assigned the class name *karman* on condition that this act is denoted by the verb *viś* preceded by the complex of preverbs *abhi-ni* (A 1.4.47 *abhiniviśaś ca*). This city has the status of being a locus (*adhikaraṇa*) with respect to the act denoted by the verb *bhuj*.

A question arises: How can one avoid the occurrence of the second triplet ending *am* after *odana-* in [1] and *grāma-* in [2] and that of the seventh triplet ending *ni* after *nagara-* in [3]? A 2.3.2 *karmaṇi dvitīyā* and A 2.3.36 *saptamyādhikaraṇe ca* occur in the section headed by A 2.3.1 *anabhihite*. The second and seventh triplets of nominal endings are respectively introduced on condition that an object or locus is to be denoted if the object or locus is not otherwise denoted (*anabhihite*). If the object or locus is otherwise denoted, the first triplet ending *su* occurs after a nominal to express a base meaning (*prātipadikārtha*) by A 2.3.46 *prātipadikārthaliṅgaparimāṇavacanamātre prathamā*. In Pāṇini’s derivational system, the denotation of a kāraka by a nominal ending is subordinated to its expression by a verbal ending and a kṛt affix. It is to be noted in this connection that, according to Patañjali, affixes like the kṛt affixes in question, called *avyayakṛt* (A 1.1.39 *kṛn meḥantaḥ* and A 1.1.40 *ktvātosunkasunaḥ*), denote an act denoted by a verb (*bhāva*), and not a kāraka.

In VP 3.7.81–86 Bharṭṛhari bases himself on the arguments Patañjali brings forward in MBh on A 3.4.26. According to Bharṭṛhari, the principal (*pradhāna*) meaning of a sentence is an act (*kriyā*) denoted by a finite verb and an act denoted by a verb to which an *avyayakṛt* is introduced is a subsidiary (*guṇa*) to the former. In [1]–[3], principal acts are respectively the acts of eating, of wishing, and of entering and subsidiary acts are respectively the acts of cooking, of going, and of eating. In his view, in addition, a kāraka is a power (*śakti*) of functioning as what brings an act to accomplishment and also the locus of such a power (*dravya*). In [1] the rice gruel has two different powers: the power of functioning as object with respect to the act of eating and that of functioning as object with respect to the act of cooking; in the same vein, in [2] the village has the power of functioning as object with respect to the act of wishing

and that of functioning as object with respect to the act of reaching; in [3] the city has the power of functioning as object with respect to the act of entering and that of functioning as locus with respect to the act of eating.

Bhartṛhari argues that when the power of functioning as object with respect to the principal act, denoted by the finite verb, has been denoted by the verbal ending, the power of functioning as object with respect to the subsidiary act, denoted by the verb after which the avyayaḥ occurs, appears as if denoted (*abhihitavat*) and that the power of functioning as locus with respect to the subsidiary act does not cause a grammatical operation to introduce the seventh triplet ending, which contradicts a grammatical operation to introduce the first triplet ending caused by the power of functioning as object with respect to the principal act. It is to be noted that in [3], where there is no item capable of denoting a locus other than the seventh triplet ending, the undesired consequence would result that the seventh triplet ending occurs after the nominal *nagara-* to express the city as locus with respect to the subsidiary act.

Thus we see that Bhartṛhari accounts for the derivation of the sentences in question, on the theory that in a sentence meaning, which is a qualifier-qualificand relation (*viśeṣaṇaviśeṣyabhāva*), an act denoted by a finite verb forms a chief qualificand; that a single substance has different kāraka powers; and that a subsidiary power, which is related to a subsidiary act, is subordinated to a principal power, which is related to a principal act. Clearly, this concept of subordination introduced by Bhartṛhari presupposes his theory of a sentence meaning that holds within the framework of Pāṇini's derivational system.